

2025年度 静岡学園中学校・高等学校 自己評価

本校の教育理念	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自主自律の精神 自分で考え、判断・決断し、混沌とした社会で自立して生き抜くための「自主、自律の精神の尊重」 2. 共生の精神 地球上の全人類が地球規模の課題を協力して解決し、すべての生命がともに生きていくことを願う「共生の精神」の尊重 3. 真理と生命を尊ぶ精神 生命の尊厳に対する畏怖の心と人間としての誇りを持ち、私利私欲なく真理を追究し、真摯に社会に貢献しようとする「真理と生命を尊ぶ精神」の尊重 4. 進取の精神 新しい時代を見据え、どんな課題が起きても果敢に解決し、進歩させようとする「進取の精神」の尊重
---------	--

本校の教育目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 真のエリートの育成 知性・品性・高い倫理観、崇高な使命感を持った真のエリートを育成する 2. 地域社会に貢献できる人材の育成 郷土愛と地域愛を育て、様々な形で地域社会に貢献できる人材を育成する 3. 国際社会に貢献できる真のリーダーの育成 多様な価値観、幅広い教養とコミュニケーション能力を身につけ、日本文化を理解し、国際社会に貢献できる真のリーダーを育成する
---------	---

教育の特色	<p>これからの未来社会が抱える複雑で解決困難な課題を克服できる人材を育成するために、高校には全国初となる「教養科学科」を設置。従来の普通科以上に幅広く、深い知識とともに、領域横断的な視野を身につけ、「自ら考え、論理的に思考・分析し、知識を統合する力を養う。教養科学科として、本校独自の特微的な専門科目を履修・修得していく。また、外部講師及び本校教員による「シズガク・ゴールデン・タイム(SGT)」は正規の授業ではないが、生徒にとって貴重な学びの機会となっている。その他にも、国際交流をはじめとした多彩な学びのプログラムが用意されている。</p>
-------	---

達成度
 A ほぼ達成（8割以上）
 B 概ね達成（6割以上）
 C 変化の兆し（4割以上）
 D 不十分（4割未満）

担当部署	No.	2025年度重点目標	具体的施策及び計画	達成状況 (重点目標を達成するためにに行った具体的事項)	達成度 A・B・C・D
分掌 教務部 教務課	1	教務課から全教員への周知事項を徹底し、全教員が共通認識を持って教育活動を行い、教育活動の円滑な推進を図る。	(ア) 定期試験の実施方法やルールなど、全教員が共通認識を持つため明文化したものを作成し、その時期に応じて随時情報発信を行うことで、全教員が共通認識を持って教育活動を行えるような体制を整える。重要な内容はそのイベントの7日前までに概要を発信する。 (イ) 常に新任教職員の目線で、いつ・どこで・何を・どのように教育活動を行うかを明確化できるように教務課から全教員に情報を発信する。特に、情報処理に関係する内容については可能な限り事前にシミュレーションしてマニュアルの文面をより良いものにする。 (ウ) 情報の発信方法としてはメールやBLENDを使用するが、それらに頼らず直接コミュニケーションを取って確認し合うことも大切にする。	(ア) 急遽の対応が必要な場面もあったが、期日までの情報発信はほぼ確実にできている。模試監督表をスプレッドシートでも配信することにより、閲覧しやすさだけでなく、突発的な変化に対応できる形になってきた。 (イ) メールは「どの立場としての発信か」の小見出しを付け、わかりやすく整理している。成績処理ファイルも実際にシミュレーションしてマニュアル点検を十分にを行った。また、今年度も定期試験監督表は常動向けと非常動向けを区別して、出勤に配慮したものとした。メール量がどうも多くなってしまっは課題である。 (ウ) 各課員が様々な場面で直接のコミュニケーションを心掛けている。非常勤講師とのコンタクトも多めにし、様々な確認ができるようにしている。多くの教職員に様々な変更を快く引き受けてもらえている状況である。	A
分掌 教務部 教務課	2	教育活動が滞ることがないように配慮する。教務備品の管理を確実に行う。また、土曜授業や受験対策講座を含む学校行事について、先を見通しながら企画・情報発信を行う。	(ア) 教務備品や印刷室内の備品・印刷用紙の状況を日々把握し、不足分を早めに補うことで、教育活動が滞ることのないようにする。また、視聴覚機器については視聴覚ワーキンググループの委員と連携を取り、破損などがなく確認し、常に最善の状態教育活動が行えるようにする。 (イ) 月行事や週行事と日課について情報発信を確実にし、特に非常勤講師への日課連絡に漏れがないように配慮する。また、BLENDへの出入力について周知し、毎週入力点検を行える体制を整えていく。 (ウ) 高3受験対策講座は昨年度の反省を踏まえて5月のうちに基本方針を提案、7月には授業開講方法を確定し、9月に時間割作成に入る。教員、生徒ともに12月をどのように迎えたらいかがを見通せるよう早めに動く。	(ア) 備品の定期点検・補充は確実にに行っている。特に、印刷室のコピー用紙については毎朝補充を行い、必要に応じて発注をかけている。全教室にモニターが入り授業への活用度が高まった。高校入試では多数の欠席者が出たが、昨年度からスプレッドシートおよびモニターの活用を開始したことにより、情報を一元化できて混乱なく入試を運営することができた。 (イ) 行事予定の配信は毎回確実に行われている。また、非常勤の出動に関わる変更事項は予め確実に配信を行った。出欠入力の点検および督促は不十分なところもあるので、担任副担任や学年部には定期的な点検を呼びかけている。 (ウ) 土曜授業は不在となる教員の多さで苦労したものの毎回無事に開講できた。高3受験対策講座は10月末までは手詰まりの状況だったが、コース設定を明確化することで講座を組みやすくなった。受講者数の振れ幅が見えないのは苦しいが、次年度以降も継続できそうである。	A
分掌 教務部 教務課	3	教務課内の協力体制の強化に加え、日課業務について情報管理課や研修課とも協力体制を築き、関連する業務を共有し協力体制を整える。	(ア) 教務課全教員が教務課として行う任務を可視化し、常に誰がどのような業務を行っているのか把握できるようにする。また、お互いに業務の進捗状況を確認し合えるようにする。特に日課グループ内ではGoogle共有ドライブで情報を共有し、突発的なトラブルにも対応できる体制を整える。 (イ) 日課業務など教務課以外の教職員と協力体制を強化するため、月2回程度の部課長会議で連携できる部分を共有する。また、年間の教務課スケジュール表と日々の業務内容をまとめたものを作成し業務を可視化していく。変化する学校行事や教務システムに合わせ、学期に2回程度スケジュールの見直しを行う。 (ウ) 授業日は朝7:30に集合し、日課・時間割変更・代行を確認し合う。また、時間割作成や試験本部の運営などチームとして行う業務については、情報機器を活用しながらミスなく確実な運営が出来るようにしていく。そのために必要なシミュレーションも行っていく。	(ア) 教務課内で共有している役割分担一覧表について、行事の変更に伴う改定版を複数作成し、次の見通しをより見やすいものにした。また、今年度から日課担当者向けに共有フォルダ内で情報共有を始めたことで、それぞれの業務時間をより大切にすることが出来ている。突発的な状況にも対応しやすくなった。 (イ) 今年度も部課長会議をおよそ2週間に一度のペースで行ってきた。2学期期末試験の際には教務課以外の教務部教員にも試験運営に協力してもらった。 (ウ) 毎朝7:30に教務課員が集合し、周知事項を確認し合った内容を全教職員に向けて確実にBLEND配信を行った。定期試験の運営には共有ドライブを活用して養護教諭との連携や欠席者情報発信の作業効率化を図っている。	A
分掌 教務部 情報管理課	4	静岡県「ふじのくに」学校教育情報化推進計画「法人の高校整備計画・情報セキュリティ基本方針・インフラ整備提案依頼書など」に従った情報システムを構築する。	(ア) 生徒1人1台端末に伴うインフラとして、既存のChromebook40台を管理し、教員による指導のもと、生徒の故障時の対応として用い、学習に支障が出ないように整備する。 (イ) 教育棟4階のWiFiアクセスポイント15台を交換する。 (ウ) 各種情報機器の故障時の対応をマニュアル化し、情報管理課員を中心に対応できるようにする。	(ア) 高校1年生の1人1台端末を引き渡した。各学年からChromeBookの故障も報告されたため、修理依頼とともに学校所有のChromeBookを貸し出し対応した。 (イ) Googleformを利用した朝テストを毎週実施した。4階アクセスポイントを増強することで、350人が同時にテストを受けることができる環境を整えた。 (ウ) ChromeBookの故障時の対応ができる教員は各学年1人ずつ在籍している。情報管理課の教員全員が対応できるように、マニュアル化を行い、代替機貸出時の借用書のレイアウトを作成した。	A

担当部署			No.	2025年度重点目標	具体的施策及び計画	達成状況 (重点目標を達成するために行った具体的事項)	達成度 A・B・C・D
分掌	教務部	情報管理課	5	教務課・研修課・進路部・生活部と連携し、各アプリケーションにおける操作、データ連携を高める。	(ア) 各アプリケーションの操作方法をマニュアル化する。 (イ) 生徒に関する各種記録をデータベース化する。 (ウ) 情報管理課内の役割分担を明確にし、専門性をもって業務にあたる。	(ア) BLENDの操作方法を一部マニュアル化した。 (イ) BLENDにて部活動や検定の結果を生徒が入力・申請する機能を解放した。グループワークの機能を解放し、円滑に連絡をとれるよう貢献した。 (ウ) BLEND関連の仕事とGoogle関連の仕事を担当者を決めて、分担し始めている。	A
分掌	教務部	情報管理課	6	生徒が1人1台端末を利用して主体的な学習に取り組むことができるように、ネットワーク環境を整える。	(ア) 教育棟4階のWiFiアクセスポイント15台を交換する。 (イ) 来年度以降の中学生のネクストギガの構想を考える。 (ウ) 研修課と協力して、Chromebookを活用した授業の在り方を研究する。	(ア) 教育棟4階のアクセスポイント全15台の交換を行った。 (イ) 中学部NextGigalに伴う1人1台端末用の新規ChromebookのBYAD (Bring Your Assigned Device) 計画を再来年度の実現を目標に進めている。 (ウ) Chromebookやモニターを活用した研究授業を実施した。	A
分掌	教務部	研修課	7	研究授業を教員の授業力向上に役立てる。	(ア) 3名の新任教員に対し、研究授業を1学期中に実施する。早い時期に実施することで新任教員の授業力を確認し、その後の教科部会を通してベテラン教員が助言し、授業力の向上を図る。 (イ) 2年目～中堅教員の研究授業を各教科1名ずつ実施する。 (ウ) ベテラン教員が持っている優れた授業法を紹介する研究授業を各教科1名ずつ実施する。特に、その教員の授業アンケートにおいて優れた評価を得ている項目を公表してもらうことで、生徒から高評価を得ている授業法の情報共有を図る。	(ア) 3名の新任教員に対し、研究授業を1学期中に実施した。早い時期に実施することで新任教員の授業力を確認し、その後の教科部会での意見交換やベテラン教員による個別アドバイスにより、授業力の向上を図った。 (イ) 2年目～中堅教員の研究授業として、国語と数学の研究授業を実施した。 (ウ) 後期にはベテラン教員が持っている優れた授業法を紹介する研究授業を各教科1名ずつ実施する予定であったが実施できなかった。次年度に向けて、その教員の授業アンケートにおいて優れた評価を得ている項目を公表してもらうことで、生徒から高評価を得ている授業法の情報共有を図ることを模索する。	B
分掌	教務部	研修課	8	授業評価アンケートを活用し、教員の授業改善を行う。	(ア) アンケートの質問項目を本校の教育目標や特徴に合った内容になっているか、アンケートを運営・分析する業者や本校教員の意見を取り入れながら修正を図り、本校の理想とする授業像・教師像を明確化する。 (イ) アンケート内容とその目的を事前に教員に示すことで、本校の理想とする授業像・教師像を情報共有する。 (ウ) 授業評価アンケートの「総合評価7項目平均」が昨年度79.1ポイントであったことから、本年度は80ポイント以上を目標とする。	(ア) アンケートの質問項目を本校の教育目標や特徴に合った内容になっているか、教科主任者会議にて提起した。本年度は昨年同様の質問項目とするが、次年度に向けてアンケートを運営・分析する業者や本校教員の意見を取り入れながら修正を図り、本校の理想とする授業像・教師像を明確化する方針を打ち出した。 (イ) 7月の職員会議にてアンケートの質問内容とその目的を事前に教員に示した。これをふまえて2学期の授業の改善ポイントを示すことができた。 (ウ) 本年度は7月の授業評価アンケートを実施しないという申し送りを受け、12月の1回のみの実施となったが、これでは1学期の授業アンケートをふまえて2学期の授業改善を図ることが困難なため、次年度は以前と同様に7月にも実施できるように予算を組んだ。	B
分掌	教務部	研修課	9	校内・校外研修を通し、教員の資質・能力を向上させる。	(ア) 私学協会や予備校などが主催する校外研修に、延べ人数で50名以上の参加を目標とする。 (イ) Findアクティブラーナーによる研修システムにおいて、教育実習生や次年度採用教員の研修にとどまらず、魅力あるコンテンツを紹介したり、視聴を推奨したりするなどの方法で、教員全体での活用率の向上を図る。 (ウ) 研究授業と授業アンケートの連動を図り、研究授業における教員による授業評価と、授業アンケートにおける生徒による授業評価にどのような相関があるのかを分析し、生徒と教員の授業評価のズレを是正する研修の場を設ける。	(ア) 私学協会や予備校などが主催する校外研修に、1月現在で延べ人数において20名ほど参加している。 (イ) Findアクティブラーナーによる研修システムにおいて、次年度採用予定の新任教員に事前研修を課した。 (ウ) 研究授業と授業アンケートの連動を今後検討する。研究授業における教員による授業評価と、授業アンケートにおける生徒による授業評価の相関の分析やズレの是正について模索する。	B
分掌	生活部	生徒指導課	10	生徒の自主性、主体性の育成を目指した生徒指導。	(ア) 生徒会活動への指導と支援により、生徒の自主性・主体性を育む。 (イ) ボランティア活動の指導と支援により、生徒の自主性・主体性を育む。 (ウ) 部活動の活動や大会・発表会のアナウンスを行い、お互いに応援し合う雰囲気づくりを行う。	(ア) 生徒会が中心となり、静学祭を引っ張り大いに盛り上がった。しかし、その盛り上がり方がお客様への配慮ができていないところがあった。周りに配慮した行動ができるように促していきたい。 (イ) ペットボトルキャップ回収(通年)、不要になった文房具の回収(通年)、学校避難所体験(12月)、不要になった参考書の回収・配付(2・3月)、静岡マラソンボランティア(3月)実施し、生徒が積極的に参加した。 (ウ) サッカー部・野球部の応援を募集し、希望者で応援を行った。希望が少ない時もあったが、一丸となって応援し、選手を盛り立てることができた。今後は、希望者の人数を増やしていきたい。	A
分掌	生活部	生徒指導課	11	学校生活における基本的な生活習慣の習得、自らルールを守る心づくりを目指した生徒指導。	(ア) 風紀委員、交通安全委員による活動を活発に行い、生活習慣の改善を促す。 (イ) 登校指導による交通指導・声かけ運動の継続、学校周辺の見回りにより、学校生活に対する基本的な生活習慣の基盤、安全を確立する。 (ウ) 各学期末に、各自で生活の振り返りを行い、評価し、その後の生活目標を立てさせ、生徒の生活改善を促す。	(ア) 風紀委員長による朝礼での呼びかけ、風紀委員の各クラスでの呼びかけ、月目標の掲示を行った。半数以上は、月目標を意識し行動してくれている。生徒・教員で協力し、もっと意識を上げていきたい。 (イ) 毎日登校指導を行い、声かけや交通整理・交通安全指導を行なっているが、交通整理を行なっている教員頼みになっている生徒がいる。安全のために行なっているものだが、自ら安全確認を行う習慣を身につけさせるような声かけも必要だ。 (ウ) 1学期に実施したが、2学期に実施できなかった。3学期にもう一度実施し、しっかりと振り返りを行い、自分の生活行動の改善に繋げていきたい。	B
分掌	生活部	生徒指導課	12	生徒の安心・安全を目指した生徒指導。	(ア) 学校生活アンケート(いじめアンケート)を実施し、安心して学校生活を送る環境づくりを行う。 (イ) 交通安全委員会を中心に、自転車の施錠の呼びかけを行う。	(ア) 学校生活アンケートを実施し、問題があった生徒と、担任・生徒指導課・学年主任等で協力し面談を行った。それぞれの問題にしっかり対応ができた。 (イ) 交通安全委員会による、清掃活動、施錠の呼びかけを行った。	A

担当部署		No.	2025年度重点目標	具体的施策及び計画	達成状況 (重点目標を達成するために行った具体的事項)	達成度 A・B・C・D	
分掌	生活部	保健衛生課	13	健全な学校生活を送れるように、生徒自身が心と体の健康を管理をできるようにする。	(ア) 各種健康診断を実施し、必要に応じて受診依頼を出すなどの事後指導を行う。 (イ) 日常における観察を行う(HR、授業、課外活動、保健室など)。生徒が保健室を利用した際は、記録をBLENDで担任と共有する。 (ウ) 生活リズムを整えるように啓蒙し、生活アンケートを実施する。アンケート結果を担任・学年と共有し、「ソーシャルワーカー等の外部機関につなげて、生徒にフィードバックをはかり改善につなげる。	(ア) 理由のある生徒2名を除いて、すべての生徒に健康診断を行うことができた。また、昨年度同様に、教員の協力で生徒の待ち時間を大幅に短縮し、円滑な健康診断が実施できた。更に、健康診断の結果を生徒に配布し、自らの健康状態を把握できるよう努めた。 (イ) 保健室利用記録や感染症による出席停止をBLENDに登録し、教員間での共有を図った。また、今年度よりBLENDを活用し、学校生活に不安のある生徒に対し、早期に対応できるように管理職、学年主任、保健衛生課職員と共有を図った。 (ウ) 生活習慣アンケートを行うことで、生活習慣の確立されていない生徒を教員(担任)が把握し面談を実施した。そして保健委員の生徒を通してアンケート結果を配信し、生徒自身が心と体の管理ができるように支援を行った。	A
分掌	生活部	保健衛生課	14	感染症の予防、対策を行う。	(ア) 「保健だより」を月1回発行する。(BLENDで配信。教室掲示。)その他、啓発ポスターを掲示する。 (イ) 生徒保健委員会を開催し、生徒に対する啓発活動を行う。 (ウ) 手指消毒液の設置(各階の手洗い場、食堂、図書室前、事務室前、体育館など)、本校の状況に合わせた対策を行う。	(ア) 保健委員の生徒が、毎月健康に関する情報を保健だよりで発行し、保健室前や教室に掲示した。 (イ) 保健委員会を年3回開催し、学校全体や各学年での目標を設定した。また、インフルエンザ感染症対策や熱中症対策などの具体的な取り組みを各学級に提示した。更に昨年度同様、高校2、3年生は積極的に献血の呼びかけを行った。 (ウ) 保健委員の生徒が中央階段に設置してある感染症ボードを通じて、感染症情報を生徒全体に発信した。	A
分掌	生活部	保健衛生課	15	自ら立ち直る力の育成と他者と共生できる力を育てる。	(ア) BLENDを通じて、5月と夏休み明けの9月(生徒指導課とあわせて)に「こころの健康実態調査」を実施し、結果から生徒の様子を判断し必要に応じて面談を行う。 (イ) 学年部、養護教諭、スクールカウンセラー、教育相談担当で情報共有の場(=KGH)を月1回設ける。スクールカウンセリングの周知徹底を行う。 (ウ) 学年部で、生徒の情報共有の徹底を図る。また、スクールカウンセラーやきりり職員からの助言を、生徒や保護者への対応に生かす。高校1・2年生(探究クラス中心)に、外部講師によるレジリエンス教育(=静学SEL)を行うことで回復力を育てる。	(ア) こころの健康状態調査を実施し、その結果から必要な生徒への面談を生活部教員が行った。 (イ) KGHを毎月開催し、学校生活に不安を抱える生徒の情報共有とその対応をチームで検討した。スクールカウンセリングのお知らせを毎月BLENDで配信し、広く利用してもらうことができた。 (ウ) 静岡市発達障害者支援センターきりりの巡回指導を受け、必要な情報を得ることで生徒理解につなげ、より適切な生徒への支援につなげた。また、静学SELを実施し、生徒のレジリエンスを高めることに努めた。	A
分掌	生活部	安全整備課	16	(防災関係)常時・非常時における防災安全体制の構築	(ア) 地震防災・災害対策計画(地震対策マニュアル)の運用及び、定期的な防災倉庫の管理を行う。 (イ) BLEND(校務支援システム)を活用し、災害への対応を迅速かつ確実に行う。 (ウ) 異なる状況での防災訓練を実施し、防災への意識を高め万が一に備える。	(ア) 地震防災・災害対策計画(地震対策マニュアル)の運用については例年通り行うことができたが、作成から5年が経過しているため、改訂に向けて内容の見直しを始めた。防災倉庫の管理については、事務局と連携しながら計画的に行うことができた。 (イ) 7月30日発生のカムチャツカ半島付近の地震に伴う津波警報への対応については、常に情報を収集しながら管理職と相談し、生徒・保護者に対して適切な対応をとることができた。 (ウ) 年度初めの第1回では避難方法・避難経路の確認に重点を置き、第2回では抜き打ちで訓練を実施して年度初めに確認した事ができるかどうかを確認できた。第3回は災害に関する知識の確認および防災に対する意識を向上させるため中学1年、高校1年を対象に防災クイズを実施する予定である。	B
分掌	生活部	安全整備課	17	(整備関係)定期点検や危険箇所への対処を万全なものとし、生徒・教職員が快適に活動できる環境を整える。	(ア) 計画的な生徒用机イスの入れ替え(故障があり生徒がけがをする恐れのあるものを早期撤去)を行う。 (イ) 校舎内・グラウンドなど学校施設の定期点検の実施し、事務局と連携しながら対応する。 (ウ) 清掃用具・備品の点検を行い、速やかに補充・改善を行う。	(ア) 夏季休業中の新旧机・椅子の入れ替えは120セットを交換し、全体のおよそ5割が新しいものとなったが、傷みの激しい旧タイプの机・椅子が多くなっているため、来年度以降、可能な限り入れ替えのペースを上げることにした。 (イ) 校舎内・グラウンドなど学校施設の破損・消耗については、用務員の協力により迅速に対応することができた。また、用務員で対応が不可能な場合は、事務局と連携し対応した。 (ウ) 清掃用具・備品は計画的に余裕をもって整えることができる。また、カーペット床の清掃のため新たに各階に1つずつハンドクリーナーを準備した。	A
分掌	進路部	進路指導課	18	進路シラバスに基づいた進路指導計画を実施し、生徒の進路実現の意識を向上させる。	(ア) 進路行事の目的を各学年進路指導教員を通じて生徒に周知し、生徒の進路意識を高め効果的に実施する。 (イ) 学年部、各教科、学び支援課との連携により、生徒の進路実現にむけて多方面からのバックアップを行う。 (ウ) 進路指導室について生徒に周知し、進路指導室に入室する生徒の相談に積極的に応じる。	(ア) シラバスに基づき、高1は社会人によるキャリアガイダンスや適学適職診断を実施することで進路研究を進め、文理選択へ繋げた。高2は進路研究や進路講話、OB・OGによる講話を実施し、進路の絞り込みを進めた。 (イ) 模擬試験の事前準備および事後指導を各学年・各教科で計画的に実施することで、生徒の学力状況を的確に把握させることで進路意識を高めた。また、教養系SGTでも進路に関連した講座を開講し情報を提供することで、生徒の意識向上を図った。 (ウ) 4月に進路ガイダンスを実施し、生徒に周知した。高3については、志望理由書の作成や面接対策の動画、および小論文基本講座の動画を進路指導室内のPCで視聴できるよう整備した。	A
分掌	進路部	進路指導課	19	大学進学数値目標(国立大学100、難関私立大学120)達成のために、補講を計画・実施するとともにテスト分析とフィードバックの仕組みを構築する。	(ア) 補講系SGTを効果的に実施するとともに、高校3年生の夏期・冬期特別授業中の補講や共通テスト後の補講の実施を図る。 (イ) ファインシステムやコンパスやマナビジョンにより、教員および生徒に振り返りの機会を提供する。 (ウ) 学年部との連携により、テスト分析会や外部講師による進路講演会を企画実施する。	(ア) 高校2・3年生の希望者を対象に、放課後の7・8限に補講系SGTを実施し、復習と応用力の強化を図った。また、夏冬の特別授業に加え、高校3年生の希望者を対象に午後補講を実施した。共通テスト後にも希望者を対象に個別試験対策講座を開講した。補講系SGT以外の高3補講数は33講座、総時間数は計393時間であった。 (イ) 各模擬試験実施後には、過年度比較・過去回比較・クラス間比較などのデータを学年で共有し、客観的な数値に基づいて課題を明確化した。さらに、共通テスト後には出願検討会を実施し、教員間で情報を共有するとともに、戦略的な出願方針の検討を行った。 (ウ) 教員対象に外部講師を招聘し、テスト分析会および進路講演会を実施した。模試結果や最新の入試動向を踏まえた専門的知見を共有することで、データに基づく個別指導の質的向上を図った。また、教員間で大学入試情報を共有し、連携して生徒の進路実現を支援した。	A

担当部署		No.	2025年度重点目標	具体的施策及び計画	達成状況 (重点目標を達成するために行った具体的事項)	達成度 A・B・C・D	
分掌	進路部	20	進路指導課	生徒一人ひとりの進路希望を実現するために、きめ細かな指導体制を確立する。	(ア) 教員全体での小論文および志望理由書の指導体制を確立する。そのためにも進路指導室の小論文関係の蔵書を充実させる。 (イ) 各学年の進路指導課教員がLHR等で使う進路指導のためのワークシート等をつくり、生徒がモチベーションを維持できるようにサポートする。 (ウ) 学年部や各教科と連携し、大学入試の新しい傾向等に関しての情報共有をする。また、進路指導に役立つ情報は素早く教員・生徒・保護者に伝える。	(ア) 高3希望者を対象に、1学期に志望理由書および面接対策講座を実施し、夏期補講では小論文入門講座を開講するなど、早期から受験準備に取り組む体制を整えた。小論文指導は大学ごとの出題形式に対応するため、マンツーマン指導の体制と継続した。また今年度は、特に長い志望理由書も小論文同様に扱った。指導生徒数は延べ126名(2月10日現在)である。 (イ) 進路シラバスに基づき、必要なワークシートを学年進路課の教員が作成し、生徒の進路意識の向上を図った。特に高校3年生においては、受験校指導の一環として受験スケジュール作成用ワークシートを活用し、出願から受験本番までの計画を可視化することで、個々の受験指導に役立てた。 (ウ) 多様な進路・入試制度に対応するため、高3の模試では、可能な限り生徒の希望に沿って受験科目・方式等を選択できるように配慮した。	A
分掌	進路部	21	学び支援課	SGTの外部講師講座を加えると同時に見直しを図り、体験を通じて各生徒の特技を増やしたり高めたりすることで、今後の生活で生かせる講座を提供できるようにする。	(ア) 部活動や分掌との共同開催を取り入れることで、部活顧問などの人脈を活用した外部講師を招き、部活動に所属する生徒に加え、部活に所属しない生徒にも外部講師のレッスンを一般開放することで、学校全体で質の高い専門講師の指導を受けられるようにする。 (イ) 部活顧問や各分掌で外部講師を呼びやすいように、謝礼の金額や支払い方法などの料金体系のガイドラインを定め、学び支援課と各部顧問との連携を取りやすくする。 (ウ) 従来から実施しているSGTの講座についても、人気のある講座は継続して実施し、部活や生徒会などに所属していない生徒にとっても本校での学校生活の活力となる場となるようにする。	(ア) 部活動や分掌との共同開催はかなわなかったが、本校若手職員による「SGT 静学エンジョイバドミントン」がもくせい会館の体育館を借用し開講され、部活動に所属していない生徒も参加できる運動系講座が開講された。 (イ) 年度初めに謝礼の金額や支払い方法などの料金体系のガイドラインを教職員に提示し部活動や各分掌で外部講師を呼びやすいように配慮したが、特に新たな申込みはなかった。むしろ芸術科の教員から講師のご提案をいただくことがあった。 (ウ) SGT Global Communicationでは生徒・保護者参加型の講座で人気があった講座の続編として歴史分野では静岡大学名誉教授今野喜和人教授を精神医学分野では静岡福祉大学の長坂和則教授をお招きし、ご講演いただいた。	A
分掌	進路部	22	学び支援課	SGTの講座の広報活動を工夫し、SGTの参加率を高める。	(ア) 部活動や分掌との共同開催を取り入れることで、部活顧問や部活に所属の生徒が一般生徒への参加を呼び掛けられるようにする。また、共同開催する部活に所属する生徒の参加が確保されることで、全体としてのSGTの周知や参加人数を高める。目標数値：中学の参加率30%、高校の参加率15%。 (イ) 掲示用のSGTの案内チラシやSGTカレンダーを工夫し「いつ・どこで・だれが・どのような講座を」行うのが生徒・教員・保護者と情報共有できるようにする。 (ウ) 実施したSGTの活動の様子をまとめた「SGTレポート」を掲示やHPで公開することで、SGTの魅力が伝わるようにする。活動の写真に内容のコメントやインタビュー記事をつけることで、読者がSGTを疑似体験できるようにする。	(ア) 部活動や分掌との共同開催は実現しなかったが、中高生の希望選択者を対象としたSGT 陶芸、Stained Glass Art、季節の和菓子は、募集定員を充足し参加者は全て女生徒であった。モノづくりに関する女子生徒の参加率が高くなってきている。 (イ) Blendを活用し、SGTのフライヤーや年間カレンダーを生徒・教員・保護者で共有し生徒の参加を呼びかけ、生徒のSGTに対する参加率を高めるよう努力したが、男子生徒の参加率は、低く、逆に女子生徒の参加率が増加した。 (ウ) 「SGT活動レポート」を掲示したり、HPで公開しSGTの魅力が伝わるように努力したが、Interview記事を書けるまでには至っていない。但し農業体験講座に関する発表会を校内で来年度開催しさらにSGTに関する関心を高める方向で検討中。	A
分掌	進路部	23	学び支援課	分掌組織として機能するように、分掌内や関連する分掌外の組織との連携を図る。	(ア) SGTの企画・運営について、なるべく多くの進路部員で業務内容を共有し、特に、新任の目線でのアイデアも取り入れながら、よりよいSGTの企画と運営を行う。 (イ) 分掌外の連携の例として、「緑風塾」は各学年部、「外部講師によるSGT」は部活顧問に加え、各分掌・各教科・各学年部との情報交換により、担当者1人では企画発案できないようなSGTを実施できるようにする。特にシヅクリプロジェクトについては、「SHIZUOKACUP」1st Stage突破につながる秘策について企業関係者からの情報収集に勤める。 (ウ) 複数のSGTの講座や学校行事がバッティングすることで、SGTの参加率が下がるため、むしろSGTの講座を精査し講座数を絞り込み、各分掌と連携し行事のバッティングがないように日程を調整することで、質の高いSGTに参加しやすくする。	(ア) 業務内容を共有し、仕事を分担して円滑に業務を推進できるよう努めたが、担任業務と部活動の指導に忙殺され、一部の教員に仕事が集中してしまった。SGTは土曜日や放課後に実施されるため監督業務がどうしても偏ってしまう点を解消したい。 (イ) シヅクリプロジェクト「engine」では、高校2年生のチームが静岡県大会に3チーム、全国大会に1チーム出場することになった。学年部の教員の指導と学び支援課教員の尽力による「伸び代」を残すような発表・指導に負うところが大きい。 (ウ) SGTを実施できる曜日や生徒が参加しやすい曜日が限られたり、補講系講座もあるため教養系講座への参加者を増やすためには、どうしても講座が重複してしまう日もでてくるが、これを改善するためには抜本的な見直しが必要である。	B
分掌	総務管理部	24	総務管理課	入学式、始業・終業式、体験入学、入試説明会などの行事を、丁寧に遂行する。	(ア) 式典や朝礼などは、教室で配信映像を通して行う経験値を蓄えてきたが、その合理性を追求するとともに、配信では置き換えることができない対面での伝達が持つ意義や効用を見定めながら運用する。 (イ) 体験入学はこれまで年度ごとフラッシュアップしてきたが、今年度も、一日3セットの実施を2セットにし、来場者にとっても、運営する私たちにとっても(働き方改革に資すべく)益のある改善を試みる。 (ウ) 仕事を分担しながら進め、仕事を通じて結ばれる教職員相互の思いや苦労に触れたり、仕事の意味合いなどに対する理解を深めたりする契機となるよう心掛ける。	(ア) 入学式・卒業式では、配信の他、保護者1名に体育館へ入っていただき、子どもの晴れ姿を直接見せることができた。朝礼では、時間を調節することで延長することなく運営できた。体育館の空調が設備され、来年度は一年を通して対面で行う環境ができた。積み重ねた経験とベースに、スマートな運営を心掛けたい。 (イ) 体験入学では、静岡産業大学と共同で行う体育の講座を新設した。入試説明会では、相談ブースを増やすことで、担当教員の休憩時間の確保ができ、運営する教職員にとって働き方の改善ができた。 (ウ) 相談会のQ&Aについての打合せを行い、情報共有の場を設けた。体験入学や入試説明会を通じて、学校全体や教育活動の中で果たす役割、業務が学校運営にどのように影響しているかを振り返る機会となった。	A
分掌	総務管理部	25	総務管理課	開校記念式・記念講演や芸術鑑賞などを通じ、良質な文化資本を提供し蓄積する。	(ア) 開校記念式(60周年記念行事)における記念講演では、良質な知識人やアーティストなどを招き、生徒はもちろん教職員、保護者に優良な知見を提供することができる機会となるよう心がける。 (イ) 芸術鑑賞においては、生徒自らは触れる機会をもたないであろう作品を提供し、彼らの心情に何らかの痕跡を残す1日になるよう演目の選定と運営を心がける。 (ウ) 開校記念式の記念講演や芸術鑑賞では事前学習とともに、事後には、抽出した生徒や教職員から「感想や意見」を募り講演者や団体に届けていたが、今年度も継続して実施したい。	(ア) 開校記念式典では、60周年に相応しい記念講演の講師として、内田樹氏を招き、有意義な講演となった。来年度の記念講演は、なぜ死ぬのか根源的な問いを科学的に向き合っている東京大学小林武彦教授に依頼をした。 (イ) 今年度の芸術鑑賞は、本校体育館において『学校寄席』の公演を実施した。卒業生である春風亭梅朝師匠をはじめ、講談、色物、落語の師匠方にもご出演いただき、笑いと驚きに満ちた充実した時間となった。来年度は、グランシップ中ホールで演劇『The Greatest Musicals』を行う予定である。 (ウ) 開校記念講演での事前学習とともに、事前に質問を生徒・保護者などから受け付けた。当日、生徒だけではなく保護者にも登壇していただき、討論をおこなうことができた。多様な立場からの意見が交わされ、学校全体で学びを共有する意義を再確認する機会となった。	A

担当部署		No.	2025年度重点目標	具体的施策及び計画	達成状況 (重点目標を達成するために行った具体的事項)	達成度 A・B・C・D
分掌	総務管理部 総務管理課	26	PTAや同窓会などの活動を通じ、在校生の応援団となるよう、ご縁を結び絆を深める。	(ア) PTAの活動は、過不足のない「頃合いのいい」取り組みを探りながら進めたい。保護者との程よい交流から与えられる保護者の視点を学校活動に取り込めるよう掛ける。 (イ) 同窓会においては、「在校生支援プログラム」を教職員の考えなどを取り入れながら「同窓会ならではの適切な支援」になるよう育てていく。 (ウ) 今年度の60周年記念行事を、総務管理部としても、同窓会としても本校の発展に資することができる契機となるよう準備を進める。	(ア) PTA総会では、事前にBLENDで議案を告知した上で、賛否もしくは委任を受け付けた。当日はZOOMで配信し、総会を成立させることができた。静学祭では、PTA役員に展示の採点に加わってもらった。生徒・教職員・保護者が学びを共有する貴重な機会となった。 (イ) 全国大会出場の一部活、年度末の各クラス優秀生徒への激励をした。昨年度同様、卒業生には4年間スケジュール帳を贈呈した。さらに、今年度は、在校生のための卒業講話に講師として協力した卒業生へのお礼を新たな在校生支援として加えた。 (ウ) 同窓会総会を静学祭の中で実施したことにより、例年以上に同窓生が集まり盛り上げることができた。60周年記念事業として記念品の配付、記念パネルの贈呈式、第一TVの記念CMなど、同窓会として母校の節目を祝うとともに、本校の歩みと魅力を発信する機会となった。	A
分掌	総務管理部 図書課	27	自分と他者との違いを知り、尊重しあうことのできる心を育てる。	(ア) 本を読むことで、他を知り己と対比したり、自らの感動を引き起こすものに気づいたりすることが、自分を知る手がかりとなるため、選書を丁寧に行う。図書課の教員も購入すべき図書を毎月5冊以上選び、司書の選書とあわせて、毎月100冊から150冊程度の図書を購入する。 (イ) 本や新聞を通して、自分と他者を尊重することの重要性を認識できるため、必要な図書資料や新聞を検索できるよう、中学1年の3クラス、高校1年の11クラスに対して図書館オリエンテーションを1時間ずつ行い、検索の練習をさせる。また教員も図書館管理システムの検索機能を積極的に利用し、生徒の目線に立つ。 (ウ) 図書委員数名を引率し選書ツアーを行い、生徒同士の選書からお互いが大切と考えるものや、図書館を運営し選書する側と自分側が大切と考えるものの類似点および相違点に気付かせる。また、文化祭などのイベントを協力して行わせる。	(ア) 選書委員会を開き、選書リストの本について、司書2名、教員5名で確認をした。前期は4月から9月までの6回で合計696作品、後期は10月3日に107作品、11月7日に116作品、12月5日に124作品、1月9日に104作品、2月6日に114作品を確認した。日本語交流プログラムに関係する図書など、自己や他者を尊重する助けとなるものを選ぶことができた。 (イ) 中学1年の3クラスは国語科と、高校1年の11クラスは情報科と協力し、図書館オリエンテーションを1時間ずつ行った。また開催のため教務課や保健室とも情報を共有できた。オリエンテーションでは、生徒が必要な図書資料や新聞を検索する練習をさせた。教員も図書館管理システムの検索機能を活用した。生徒の検索の手助けができた。 (ウ) 4月の図書委員会において、6月の文化祭の仕事の担当を生徒に話し合いで決めさせることができた。クラス担任にも図書委員に文化祭の仕事があることを伝え、協力できた。生徒図書委員8名、司書2名、教員1名で選書ツアーを行い、外商担当者からも話を聞く機会を得た。お互いの選書を通じ、他者と自分の考えの類似点と相違点を知ることができた。	A
分掌	総務管理部 図書課	28	「感謝する心」や自分の考えを言語化し表現する機会をつくる。	(ア) 知識を深め、思考する力を高めるための本や新聞を揃える。選書委員会で司書と教員がお互いの選書の理由を話し合い、教職員も言語化に努め、生徒指導に役立てる。 (イ) 校内でビブリオバトルを行い、自分の「好き」を共有できる場を作る。図書委員会は生徒が中心となって開催できるよう手助けをする。 (ウ) 図書館を訪れた生徒に短い文章を書かせたり、図書委員にPOP(本の紹介カード)を書かせたりして、表現の練習をさせる。	(ア) 選書委員会では、司書、教員がそれぞれの選書の理由を述べ、お互いの選書について考えることができた。選書ツアーでは、「感謝する心」を育む本を選ぶ、という課題に取り組みせ、自分の選書について、感想を述べさせたり、「図書館のお知らせ」に載せる文章を書かせたりした。図書館キャラクター「探ドリー」の気になるニュースを紹介するコーナーを新設した。 (イ) 文化祭でビブリオバトルを開催できた。発表者に練習をさせ、教職員が意見を出し合った。当日、発表者は堂々とした発表ができ、観戦者からの質問にも答えた。運営の生徒は司会や受付を言葉を大切にしながら行うことができた。高校生の上位2名を司書1名、教員1名の引率で、9月20日の静岡県高等学校ビブリオバトルに参加させ、他校生と交流させることができた。 (ウ) セタの企画で短冊に願いごとを書く企画を行った。図書委員にPOP(本の紹介カード)を書かせ、表現の練習をさせることができた。自分が作成したPOPについて、生徒が司書や教員に言葉で説明する様子が見られた。校内POPコンクールを開催し、図書課員と生徒図書委員の投票により順位を決め、高校生17名、中学生16名の入賞者を10月1日の朝礼で表彰できた。	A
分掌	総務管理部 図書課	29	仲間をつくることも、一人で過ごすこともできる、安心な場所を提供する。	(ア) 生徒に図書館へ足を運ばせるため、毎月「図書館のお知らせ」を発行し、読書を啓蒙するポスターを貼る。 (イ) 図書課の教員は曜日で担当を決め、月に2回以上、昼休みの図書館監督を行う。また、担当の時間ではなくても、生徒が図書館を利用する時間に、不定期に教員が図書館を訪れるようにして、生徒の様子を確認する。 (ウ) 常に清潔で明るく、知的な雰囲気のある場所を維持する。自習室を利用する生徒には氏名を書いてもらい、帰宅時には挨拶がしやすい雰囲気をつくる。	(ア) 毎月「図書館のお知らせ」を発行し、BLENDなどでも配信した。読書を啓蒙するためのポスターや、図書委員が作成したPOP、生徒の折った折り紙などを展示した。図書館へ誘導するため、静学ホールに専用掲示板を設置する許可をもらい、図書委員、ボランティアの生徒、司書が協力して、2月にはチョコレート風の飾り付けなど、毎回掲示を工夫した。 (イ) 図書課の教員の担当を決め、昼休みの図書館監督を行い、生徒の安全を見守った。また、来館した生徒とコミュニケーションをとり、安心感を与えられるよう心がけた。高校3年生の自習の利用に関して、高校3年部主任や生活部長とルールを確認し、学年集会の場や張り紙などで生徒に知らせた。図書館の扉で指を挟んだ生徒がいたため、注意喚起の張り紙をした。 (ウ) 図書委員が毎月デジタルサイネージ(電子掲示板)をつくり、生徒が図書館へ足を運びたいよう工夫した。春には桜の形に切られた折り紙で飾り付け、年始には書道部部长が揮毫した干支の漢字を展示するなど、明るい雰囲気でも過ごしやすい場所を維持できている。長時間の自習の利用者には氏名を書かせることができた。挨拶をしやすい環境を保つことができた。	A
分掌	総務管理部 国際交流課	30	現行の国際交流プログラムをさらに活性化させ、生徒に多様な機会を提供する。	(ア) ニューゼaland優秀生徒派遣プログラムの安定的な継続をはかり、参加生徒に対しては、帰国後の研修発表会までをサポートする。 (イ) オーストラリア研修旅行プログラムの安定的な継続をはかり、参加生徒に対しては、文化祭での体験報告・展示発表会までをサポートする。また、オーストラリアに替わる新たな訪問先の検討も行う。 (ウ) SGTグローバルコミュニケーション講座をお任せできる講師を探し、時機をみながら年に1回は開講する。	(ア) 昨年度のニューゼaland派遣生徒による研修報告発表会を5月の朝礼にあわせて開催した。また、派遣生徒5名の紀行文が今年度末に配布する生徒会誌『清流』に掲載される。 (イ) オーストラリア研修の全行程を、引率教員が撮影、編集したうえで、5分ほどの動画にまとめた。「1日体験入学」や「学校説明会」でも上映したため、本校への進学希望理由のひとつとして挙げられることもあるほど、プログラムの認知度があがった。 (ウ) SGTグローバルコミュニケーション講座『E.W.Clark と W.E.Griffis-お雇い外国人が見た静岡-』を開催。静岡大学の今野喜和人氏に講演をお願いした。	A

担当部署		No.	2025年度重点目標	具体的施策及び計画	達成状況 (重点目標を達成するために行った具体的事項)	達成度 A・B・C・D
分掌	総務管理部 国際交流課	31	新たな交流校を探すと同時に、以前の交流の復活も目指す。	(ア) 交流・訪問先にアメリカ本土、ヨーロッパ、アジア圏内も含め、新規の交流先を探すための情報リソースを確保する。 (イ) コロナ流行以前に相互に訪問する機会もあった、緑城育華学校などとの交流再開を検討する。 (ウ) 留学生の受け入れ再開をできるだけ態勢を整える。	(ア) 静岡県の国際交流担当や日中友好協議会などから訪問受け入れの打診が数回あったが、学校スケジュールとタイミングがあわずお断りせざるを得ない状況であった。 (イ) 中国蘇州での事件などもあり、緑城育華学校との交流再開は断念するに至った。アジア近隣地域との交流機会を今後も模索する。 (ウ) 現時点では留学生受け入れの要請はないが、留学生が期間途中で帰国してしまうことのないよう、引き続き受け入れ態勢を整えていく。	B
分掌	総務管理部 国際交流課	32	留学・海外研修・国際交流に関する情報を整理して、生徒に提示する。	(ア) どの時期にどのような「留学・海外研修・国内での交流体験」が企画されているのか、リストアップする。 (イ) オーストラリア・ニュージーランドに続く、本校独自の海外研修を（行先の変更もふくめて）検討する。 (ウ) 日本国内でも体験できる、国際交流の機会を確保する。	(ア) 「トビタテ留学JAPAN」、「しずおか探究留学支援事業」に興味を示す生徒に対して、情報提供と手続きの支援を行った。カナダ、フランス、アメリカなどへの留学を目指して申請した生徒がおり、来年度初めの採用結果通知を待っている。 (イ) オーストラリア研修の告知方法・募集時期を勘案した結果、プログラム説明会には50組以上の親子が参加、本年度の研修参加生徒は31名となり、最少催行人員をクリアできた。 (ウ) 今夏、地元自治体や知人のつてを頼り海外短期留学(交流)に参加した生徒は複数名いたが、日本国外での国際交流事業は実施に至っていない。	A
学年	中学	33	生徒・保護者・地域に信頼される、魅力的な教育活動の場をつくる。	(ア) 生徒理解を第一に心がけ、生徒の変化を見逃すことなく対応し、日々生徒の実態や発達段階に即した共感と温かさをもった指導を生徒一人ひとりに行っていく。 (イ) 全ての職員が当事者意識をもち、それぞれの持ち味を生かした組織運営を行う。生徒指導上の課題や情報・手立てを素早く共有し、見通しをもった指導を行う。保護者との情報交換を誠意をもって行い、信頼関係を構築する。 (ウ) 学校評価における「総合的な学校への満足」の肯定回答が生徒・保護者とも90%以上を目標値とし、互いに刺激を与え合う機会や進路実現に向けたサポートの充実を図る。	(ア) 欠席・遅刻等、変化が見られた生徒に対し、家庭との即日連絡を徹底したことで問題の未然防止、早期対応につなげることができた。生徒の自主性を重んじ、頭ごなしの否定ではなく、なぜそうしたのかという問いかけを重視した指導を行った。その結果、生徒自らが課題に気付き、行動を修正しようとする場面が増えた。生徒への肯定的な声掛けを意図的に増やした。 (イ) 職員個人の努力のみではなく、組織としての仕組みが機能することを心がけた。学年の会議において常に方向性を共有し続けた結果、誰かがやるのではなく、チームで取り組む意識が浸透し、全職員が共通理解をもって指導に当たることができた。 (ウ) 困難な課題については、即座にケース会議を開き、1週間後、1か月後の着地点（見通し）を共有して指導に当たることができた。 (エ) 異学年学習交流や教科内等における協働学習を意図的に仕組んだことで、上級生の姿に刺激を受ける下級生が増え、学習や部活動に対する意欲の向上が見られた。様々な行事において、生徒が自らの活動を発表、称揚しあう場面を増やした結果、互いの良さを認め合う文化が醸成され、様々なアンケートにおいて学校生活を楽しいと回答する生徒を増やしている。	A
学年	中学	34	知識や言葉を使いこなす、主体的に学習する姿勢を身に付け、再現性のある学びを習得させる。	(ア) 全教育活動を通して「知識や言葉を場面に応じて使いこなす力」「知識や情報を正しく収集する力」を身に付けさせる。さらに協働的な学習活動を充実させ、自律的に行動する力や多様な集団の中で交流できる力を生徒一人ひとりに身に付けさせていく。 (イ) 産官学民が連携したリアルな探究学習や、社会に開かれたSGT・和文の学習に生徒を本気で取り組みませ、生徒の自己有用感や汎用的能力を高める。また、朝中高生新聞と「教養科学の樹」を利用したNIE学習やキャリア教育の充実を図り、再現性のある学びを習得させていく。 (ウ) 三年間の系統的な英語教育・道徳教育を充実させ、国際的視野に立ち、人権・文化・環境の理解を深める。さらに、中3修了までに英検準2級取得率を60%、2級取得を10名以上、外部模試では各教科の平均偏差値50以上を目指す。	(ア) ペアワークやグループディスカッションにおいて、聴き合う関係を土台とした対話を重視したことで、他者の意見を尊重しつつ自分の考えを進化させる姿が多く見られた。正解のない問いに対して共同で解決策を練り上げる学習を展開し、一人では到達できない高度な学びが生まれる場面で学年が上がるにつれて多く見られるようになった。 (イ) 生徒が学習に本気で取り組んだか、自分の力が社会に役立つと実感できたかを可視化することに重点を置いた。特に探究学習の成果発表の場において、連携先から社会的に見て価値のある提言か、実効性があるかといった視点のフィードバックを受け、1年間の生徒の大きな成長を確認することができた。今後学外の機関とも生徒の成長の姿を共有していくことが大切。 (ウ) 数値化しにくい領域であり、生徒の意識変容を段階的に評価した。道徳の時間において、日本固有の価値観だけでなく、異文化理解の視点を取り入れた発言や記述が少しずつ見られポートフォリオを含め生徒への価値づけを行った。環境問題や人権問題などを簡単な英語で表現する取り組みは効果があった。英検取得は準2級が25%、2級4人、準1級1人であった。	B
学年	中学	35	学校内外の多様な集団活動を通して、自律的に行動する力を育成する。	(ア) 孝友三心をはじめとする教育理念を生徒に浸透させ、静岡学園の生徒としての誇りや所属意識を育てる。生徒一人ひとりに学級や学年の一員としての自覚を促し、自らが学級力向上に努めるように指導する。 (イ) 特別活動を充実させ、学級の諸課題を生徒が自分事として捉え解決策を考える中で、「集団の中で自己の感情をコントロールする力」「他者の立場に立って物事を考える力」「他者と協働して物事を考える力」を育む。 (ウ) 「静岡学園中学校教育プラン」「中学校運営プラン」「中学校問題解決型カリキュラム」を基盤として、様々な学校行事、学習活動に生徒一人一人が明確な目的意識をもって参加するよう支援する。学級力向上プロジェクトリーダーチャートの優位な向上を生み出す。	(ア) 静学の生徒であることを単なる所属ではなく、行動指針となるよう指導を行った。理念に基づいた行動(自尊感情、良さを認める、判断力、創造力)等を生徒がどれくらい意識できているかに特に気を配った。学級力向上において、話し合い、協力、規律等の項目を生徒が毎回自己診断し、集団で課題を共有、改善していくプロセスを評価した。 (イ) 特別活動(学級活動、行事、委員会活動等)を通じた非認知能力の育成に焦点を当てた活動を重視した。数値化しにくい感情コントロールや他者理解を、行動変容の観察とプロセスの可視化、振り返りの記述によって評価してきた。学級活動の中で、生徒自らが提起した課題や改善策数を少しずつ増やし、学級の課題を自分事として捉えさせる指導を充実させた。 (ウ) 行事や学習活動の前に、この取り組みで自分(または学級)が達成したいことを自分の言葉で記述できるよう指導を行った。さらに振り返りシートで当初の目的意識に対しどのような成果や課題解決が得られたか、論理的に自己分析できていたかを評価した。レーダーチャートを見て、なぜこの数値が低いのかを分析し、具体的な改善行動を立案、実施できた。	A
学年	高校1年	36	高校生活における、基本的な学習習慣の構築を測る。	(ア) 学級担任は教科担当との連絡を密にし、提出物や小テストの状況を共有しつつ、初期指導を徹底する。 (イ) 定期試験などに向け、範囲など学習に必要な情報を速やかに共有すると共に、学習計画や、試験後の振り返りなどPDCAサイクルを意識した学習習慣を構築する。 (ウ) 定期試験の振り返りについては、職員とも情報を共有し、授業改善に繋げる。	(ア) 毎朝実施する各教科の小テストを継続し、基礎学力の定着と学習リズムの確立を図った。未提出者への声かけを徹底し、提出物管理を通じて学習習慣の定着を促した。 (イ) 定期試験に向けて学習計画や目標を可視化し、試験後には振り返りを行うことで、計画的な学習姿勢の育成に努めた。クラス担任が模試結果を分析・共有し、生徒が自身の学習状況を客観的に把握できる機会を設けた。 (ウ) 学力層に応じた取組として、上位層には河合塾全統模試への参加を呼びかけ、学年を牽引する意識の醸成を図った。また、偏差値50～55層の引き上げを課題と位置づけ、担任による個別アプローチを実施した。偏差値50未満の生徒には、定期試験および朝学習の徹底を軸に基礎固めを行った。偏差値70以上の生徒は増加しているのに加えて、模試における平均GTZはB2を維持しているが、さらなる成長のためには自主的な取組姿勢の育成が今後の課題である。	B

担当部署		No.	2025年度重点目標	具体的施策及び計画	達成状況 (重点目標を達成するために行った具体的事項)	達成度 A・B・C・D
学年	高校1年	37	生徒が安心して生活できる環境を整え、学校生活の基礎の確立を図る。	(ア) 学級担任は、孝友日誌や生活の記録を活用し、生徒理解を深め、適宜助言を行う。 (イ) 学年部会を通して、服装やクラスのルール作りについて、定期的に職員間の意思統一を図り、教室掲示等を通して徹底する。 (ウ) 配慮が必要な生徒については、クラス担任だけでなく学年主任・保健室・管理職などと情報を共有し、より良い方向にもってけるようにチームとして対応する。	(ア) 生活アンケートや個人面談を通して生徒の状況を把握し、学習面のみならず精神面の支援を行った。配慮を要する生徒については学年団および管理職と連携し、組織的に対応した。 (イ) 日々の服装・身だしなみ指導を継続するとともに、学期ごとに学年集会を実施し、集団としての規範意識の醸成を図った。夏季休業後に課題が再度見られたことから、継続指導の重要性を再確認した (ウ) BLENDを活用し、重要事項を保護者へ同時配信することで情報共有を徹底した。学校・生徒・保護者間の認識のずれを防ぎ、安定した学年運営につなげた。	A
学年	高校1年	38	進路選択に向けて、まずは文理選択に向け組織的な進路指導体制を構築する。	(ア) コース・選択科目アンケートは年3回実施する。実施前には進路学習を学年統一で行い、進路意識を高める。 (イ) コース・選択科目アンケートの実施前後には二者面談を実施し、ミスマッチがないようきめ細かく指導する。 (ウ) 進研模試前には補講系SGTを開講し、探究系だけでなく一般クラスからも核となる生徒を育てる。	(ア) 文理選択・コース選択アンケートは全3回確実に実施し、総合的な探究の時間において「シツクリfutureプログラム」を実施し、生徒が自己の内面を見つめ直す機会を設けた。自覚していなかった興味・価値観への気づきを促し、今後の進路選択のきっかけとした。 (イ) 二者面談の実施に加えて、外部適性検査「ジブラボ」を活用し、客観的データに基づいて自己の適性を把握させた。感覚的な選択にとどまらない進路検討の基盤を整えた。 (ウ) 国語・数学に関しては補講が開講された。部活動で参加できない生徒もいたが、100名程度の生徒が参加した。英語は授業内で模試の過去問を扱うことで、模試に対する意識を高めた。	A
学年	高校2年	39	それぞれの進路展望、折々に為すべきことの自覚、「自分ごと」としての学業への取り組みを実現する。	(ア) 学習の基礎・基本の徹底はもちろん、知識習得/演習とも量を重視した取り組みを目指す。BLENDやClassroomなどを活用し、短期/長期の目標に向かい、主体的に学習に取り組む雰囲気を持たせる。 (イ) 折々に短期目的を明確にさせ、朝学習や週末課題、単元テストなどに計画的に取り組ませながら、家庭学習の週間を整えさせる。その際、フォローが必要な生徒に対しては積極的に個別指導を行う。 (ウ) 外部模試では、偏差値54以上の生徒120名以上の輩出と維持、偏差値50以上の中間層の拡充、ボトムアップを目指し、授業を軸に、必要に応じてSGT(補講)なども実施する。	(ア) 生徒とのコミュニケーションは堅調だが、BLENDやClassroomなど情報過多な面は懸念材料。主体的に学ぶ雰囲気も生じつつあり、希望者による模試受験者も40名程度と堅調。放課後の自習者も多い。 (イ) 朝学習での短期ローテーションを基盤とした学びは、個々の温度差は残るものの、全体的には堅調だと判断している。ただ、フォローが必要な生徒自身が一般的に多忙な傾向があり、個別ケアを進めることが難しい面が懸念事項。 (ウ) 5教科となった外部模試(1月)では偏差値55以上の生徒は78名と苦戦。11月と比べ英語は持ちこたえ、地歴は健闘しているが、全体としては踏み張りどころ。課題は偏差値50以上の中間層の底上げと充実、トップ層の輩出。	B
学年	高校2年	40	部活動やSGT、生徒会活動などに主体的に取り組む、また中核を担う意識を持たせる。	(ア) 生徒それぞれの課外活動をサポートし、その活躍を積極的に評価する。また、生徒の適性を見極め、意図的・積極的にそれぞれの活動に導く。 (イ) BLENDやClassroom、Smartyなどを活用し、一つ一つの取り組みについて、折々に振り返りを重ねさせつつ、適切なアドバイスを重ねることで、それぞれの活動の中核・主軸を担う意識を持たせる。 (ウ) 緑風塾やLHR、進路指導などの活動を計画的・有機的に実施し、広い視野を養うとともに、能動的な進路展望に結びつける。	(ア) 卓球個人・天皇皇后杯ジュニアにて全国ベスト8(黄塚)、サッカー新人戦・県制覇をはじめ、多くの部活動で新チームの健闘が見られる。個人でも、校外での探究系コンテストや論文コンクール、ボランティア活動など多彩な挑戦や活動が見られた。探究活動(緑風塾=シツクリ)でも県グランプリ=全国大会QUEST CUPに進むチームを輩出することができた。 (イ) 折々の振り返りをはじめ、孝友日誌、面談などを通して、前向きに活動に取り組ませることができた。特に部活動については、最上級生となり、一層精力的に、前向きな取り組みが見られる。 (ウ) 今年度初めての取り組みとして、探究活動にシツクリを導入し、社会・企業(=多くの大人)との関わりの中、そこに主体的・能動的に関わる視点を育てることができた。また、その視点を進路展望にも結びつけ、有機的な指導が展開できている。	A
学年	高校2年	41	生徒が安心して生活できる環境を維持しつつ、孝友三心の哲学やスクールポリシーを理解・徹底させる。	(ア) 日頃より、孝友三心やスクールポリシーの意図するところを意識した指導、声かけを重ねる。 (イ) 日頃の目配り、積極的な声かけや面談、BLENDやClassroomなどの活用を通し、生徒の不安や悩みを早期に認識し、職員間でその情報を適切に共有しながら対応・サポートを重ね、信頼関係を発展させる。 (ウ) 生徒の安全意識や倫理観、健康などを豊かにするとともに、学校生活におけるルールを遵守できるよう、学年で統一・安定した指導を行う。	(ア) 日々、取り組むべきこと(学習、諸活動)について、生徒個々に熱量の濃淡はあるものの、基本的に前向きに地道に取り組む生徒が多い状態にすることができた。 (イ) 生活上心配がある生徒については、日頃の教員間の情報共有から、学年部会での共有、KGHへの報告、共有に至るまでシームレスな態勢を保つことができた。進路変更による転学者は年間3名に抑えることができた。 (ウ) 2学期期末試験は最低限の欠席者で済んだが、その後の修学旅行先でインフルエンザの発症が相次ぎ、また帰国後にも5クラスを学級閉鎖する状況になり苦労した。(1月にも1クラスが学級閉鎖)一方、生活上の指導案件は0件だった。	A
学年	高校3年	42	生徒一人ひとりの進路希望を実現させるため、集団としての学力向上を図るとともに、きめ細かな個別指導を充実させる。	(ア) 生徒一人ひとりへの声かけや個別面談を充実させた。生徒情報を共有し、学年団が協力して進路指導を行う。 (イ) 受験対策授業がより充実したものとなるよう、団体戦の意識付けを年間を通して行うとともに、生徒のニーズに寄り添った形で運営できるようデザインする。 (ウ) LHRや学年集会にて生徒たちに進路・受験情報を発信する。安易に方針転換することなく、最後まで諦めずに学習に取り組む姿勢を醸成する。	(ア) 生徒一人ひとりへの声かけや個別面談を充実させた。生徒情報を共有し、学年団が協力して進路指導を行った。 (イ) 受験は団体戦という意識付けを年間を通して行った。受験対策授業には多くの生徒が最後まで出席し、生徒の様子を見ながら丁寧に指導することができた。 (ウ) LHRや学年集会にて生徒たちに進路・受験情報を発信した。今年度から始まった共通テストの電子出願については、2回全体指導の機会を設けた。また、年間を通して計9回の模擬試験を校内実施した。	A
学年	高校3年	43	最高学年としての自覚を持ち、学校行事、部活動、学習活動など、学校生活全体に主体的に取り組む姿勢を醸成する。	(ア) 学年集会やSHR、LHR内にて最高学年としての意識付けを行う。 (イ) 長期休暇期間に学習環境を求める生徒のため、自習教室を実施する。対象は希望者とし、主体的に学習に取り組む姿勢を支援する。 (ウ) 静学祭や体育祭などの各種学校行事、部活動などの特別活動において、主体的に活動するよう指導する。また、学習成果や部活動の実績など、生徒の努力を評価する声かけを積極的に行う。	(ア) 学年集会やSHR、LHR内にて最高学年としての意識付けを行った。 (イ) 夏期休暇期間に学習環境を求める生徒のため、自習教室を実施した。日々40名から60名の生徒が参加し、熱心に自主学習に取り組んだ。 (ウ) 静学祭や体育祭などの各種学校行事、部活動などの特別活動において、生徒が中心となり、主体的に活動することができた。	B
学年	高校3年	44	適切な生活指導を行い、生徒情報を学年間で密に取ることで、生徒たちが落ち着いた学校生活を送ることができる土壌を作る。	(ア) チャイムと同時に着席しているよう指導することで、落ち着いて授業に入れる環境を作る。また、遅刻指導や服装指導などの生活指導を適切に行う。 (イ) 定期試験後に振り返りシートを作成し、学習への取り組み状況や学校生活について生徒自身に自己分析させ、学年部の教員間で共有する。 (ウ) 学年部の教員間で注意生徒情報の共有を密にし、学年全体として指導に関わる体制を整える。精神面・肉体面で配慮が必要な生徒については特に丁寧に情報共有を行う。	(ア) チャイムと同時に着席しているよう指導することで、落ち着いて授業に入れる環境を作った。遅刻指導や服装指導などの指導は行き届かない部分があった。 (イ) 1学期定期試験後に振り返りシートを入力させ、結果を共有した。2学期以降については、大学入試に集中させるため実施しなかった。 (ウ) 学年部会にて注意生徒情報の共有を密にし、学年全体として指導に関わる体制を整えた。精神面・肉体面で配慮が必要な生徒については特に丁寧に情報共有を行った。	B

担当部署		No.	2025年度重点目標	具体的施策及び計画	達成状況 (重点目標を達成するために行った具体的事項)	達成度 A・B・C・D
教科	国語	45	自らの目標に向かって主体的に学習に取り組む生徒の育成	(ア) 個々の生徒のレベルや要求に応じたきめ細かい指導を各学年で協力して行う。 (イ) 朝テストや週末課題の実施など、家庭学習の充実を促すための指導を1年次から計画的に行う。 (ウ) 各学年で教材研究を進めるとともに、協力して指導にあたる。	(ア) 国語科独自の授業課題を設定し、それを教員間で共有し、また添削指導を行うことによって、個々の生徒に対応した指導を集団内で共通して行うことができた。 (イ) 週末課題に連動する形で朝テストを実施することによって、基礎的な知識の定着を図り、また自ら国語を学習する機会を与えることで生徒の国語学習に対する意識づけを行うことができた。 (ウ) 教科部会を通して、教員間での意見交換や授業内容の確認を図るとともに、経験豊富な教員の知見を共有することで、国語科として協力して指導にあたることができた。	A
教科	国語	46	共通テストや新指導要領に対応した、効果的な指導方法の開発と授業改善	(ア) 活発な言語活動を通して、生徒自らが課題を見付け、主体的に解決する資質や能力を育てる授業を実践する。 (イ) 校内外の研修や研究会に積極的に参加し、共通テストや新指導要領に関する情報収集に努める。 (ウ) 週一回の教科部会の時間を活用し、教材研究の充実、評価についての共通理解を図る。	(ア) 前年度よりも授業内活動やグループワークなど、主体性を育むような授業をこれまで以上にを行うことができた。また表現課題を実施することにより「書くこと」に対応した実践を行うことができた。 (イ) オンライン上でのセミナーや校外での研修に複数の国語科教員が参加し、その内容を国語科内で共有できた。 (ウ) 教科部会において単元での指導事項や試験問題の検討を行い、また評価項目を確認することで、一貫した指導を行うことができた。	A
教科	国語	47	大学入試に対応できる学力の育成	(ア) 朝テストや小テストを積み重ね、基礎的な学力を身につける。 (イ) 週一回の教科部会の時間を活用し、授業実践や研修の成果を共有する。 (ウ) 共通試験の平均得点が、探究系が全国平均より+20点、その他の系が平均以上になることを目指す。	(ア) 朝テストや小テストを計画的に実施し、同じ内容を定期試験に盛り込むことによって、基礎学力の定着を図った。 (イ) 教科部会内で研修に参加した教員から報告を受け、共通テストにおける新たな傾向など、大学入試における課題を共有した。 (ウ) 共通テストの平均得点が、探究系121点、その他の系が94点であった。昨年度より難化したことを考えると健闘した。	A
教科	社会 (地歴・公民)	48	生徒の学ぶ意欲、主体的に学習に取り組む姿勢の育成	(ア) 因果関係を重視するとともに、資料の読み取りを通じて、生徒の「思考力」を育成する。 (イ) 各科目の授業において、グループワークやレポート作成など、生徒の主体的・協働的な学習の機会を設定する。 (ウ) 各教員の授業の魅力を高めるため、各教員が積極的に研修(校内・オンラインを含む)に参加する。	(ア) 資料の読み取りや振り返りシートを用いて、ただの暗記にとどまらない深い理解や思考力の育成が実践された。定期試験においても思考問題が概ね3割ほど出題された。 (イ) 各授業においてペアワークやグループワークが積極的に実施され、生徒が主体的・協働的に授業に参加する機会が多く設けられた。 (ウ) 予備校が実施する指導力育成研修を含む各種研修会や外部団体の研究会に積極的に参加することで、各教員が専門科目や指導方法についての知見を深めた。また、教科部会を通じてその内容を共有した。	A
教科	社会 (地歴・公民)	49	新入試や新指導要領に対応した授業の改善	(ア) 前年度の入試問題を分析し、その結果を踏まえて授業内容やシラバスを改善する。 (イ) 科目間の接続を意識して教材研究を行うとともに、現代社会に見られる諸課題の解決に向けて考えさせる授業を展開する。 (ウ) 新しい授業実践や考査の改善を通じて、生徒の資質・能力を適切に評価する。	(ア) 新指導要領のもとでの初めての入試を経て、とくに総合の科目でより思考力の育成が重視されていると分析し、歴史総合の教科書・カリキュラムを変更し、来年度から実施する。 (イ) 現代社会の諸問題を含めた学習のねらいを各単元・授業ごとに明確にし、生徒自身が問いや目標を定めて学習する実践を試み、また研究授業を通じて教科内で共有した。 (ウ) 各科目ごとに設けた課題や振り返りシートを通じて、公平かつ適切な評価をおこなった。	B
教科	社会 (地歴・公民)	50	大学入試に対応できる学力の育成	(ア) 朝テストや補講系SGTを積極的に利用する。 (イ) 生徒のレベル別指導や個別指導を行い、生徒の学力に応じたきめ細かい指導を行う。 (ウ) 共通テストにおいて、探究系は全国平均と比較して+10%、探究系以外は全国平均を目標とする。	(ア) 朝テストや補講系SGT、週末課題の意欲的な実施により、知識・理解の定着や受験対応はもちろん、生徒の学習意欲の向上につながった。 (イ) 系ごとに異なる補講を実施したり、個別指導を充実させることで、生徒のニーズを踏まえた対応を実現した。 (ウ) 探究系は日本史探究68.2、世界史探究65.1、地理探究59.1、政治経済64.2、地理総合・公共68.5であった。全国平均こそ上回ったが、+10%という目標を達成することはできなかった。原因を分析し、指導の改善につなげたい。	C
教科	数学	51	自ら学ぶ意識を持ち、主体的に学習に取り組む生徒を育成する。(指導)	(ア) 高校においては「授業」「週末課題」「朝テスト」、中学においてはそれに対応する教育内容の「連動」を意識し、実践する。 (イ) 個々の生徒のレベルに応じたきめ細かい指導を実践するため、教材のより良い活用を検討し、各学年で協力して指導にあたる。 (ウ) 生徒に数学の面白さを認識させ、生徒の探究心を高める内容豊富な授業を実践するため、教材や授業展開などの工夫を実践する。とくに高校生は1人1台端末を持つので、効果的に活用していく。	(ア) 中・高ともに「連動」を意識した教育ができていた。 (イ) 各教員が授業集団の生徒に合わせた授業展開をすることができた。また同一評価集団においては横並びの教員が連携をとり、情報共有することができた。 (ウ) 各教員が教材研究を熱心に行い、生徒に還元することができた。また、生徒がChromebook端末を使い、配信された朝テストや週末課題の解答を確認したり、教員がsmarkyを使いテストの解答を配信するなど工夫を凝らした。	A
教科	数学	52	多様化する入試に対応できるような指導方法を研究する。(教材研究)	(ア) 基礎基本の確立を意識した作問を心掛ける。「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」を意識した作問を確実に行う。 (イ) 昨年度までの入試をより深く分析し、本校生徒の課題を意識しながら指導にあたる。とくに昨年度数学ⅡBCの共通テストが初めて実施されたため、その研究を行っていく。 (ウ) 新学習指導要領で導入されている統計分野の指導方法の研究を進める。	(ア) 生徒の状況に合わせた問題作成をすることができた。また、三観点別評価に合わせた問題を適宜作成することができた。 (イ) 朝テストや授業、定期試験の中で、大学入試と本校生徒の傾向を意識しながら指導することができた。共通テストの数学ⅡBCについては過去問や問題集を扱うことで見えてきたこともあるので、今後教員間で指導の方向性を決めていきたい。 (ウ) 各教員が意見を交換しながら指導に当たることができた。授業で扱う教員が増えたので、今後は入試の傾向を見ながら内容をブラッシュアップしていきたい。	A
教科	数学	53	教員の教科観の共有、授業内容・指導方法・評価方法を検討する場として教科部会を機能させる。(組織)	(ア) 教科部会や研究授業検討会において、指導方法・課題の出し方・課題の取り組みませ方を共有できるようにする。 (イ) 各教員、学年部、系ごとの取り組みの情報交換・情報共有を行い、教養科学科の数学科としての指導方針を確立する。 (ウ) 新学習指導要領に適した三観点評価を共有する。	(ア) 授業が横並びの教員が部会以外の時間も使い、情報共有することができた。研究授業の振り返りを全体でできなかった。その機会を作らなければならない。 (イ) 生徒のレベルや状況に合わせて選ぶ問題、難易度は変わるため「教養科学科の数学科としては難しいが、教員間で連携をとって指導に当たることができた。 (ウ) 情報共有しながら、各評価集団に適した三観点評価をつけることができた。	B

担当部署		No.	2025年度重点目標	具体的施策及び計画	達成状況 (重点目標を達成するために行った具体的事項)	達成度 A・B・C・D
教科	理科	54	生徒の興味や関心を引き出し、主体的な学習姿勢を育成する。	(ア) 高校においては学期に3時間程度、中学においては週に1時間程度の実験(演示実験、思考実験を含む)を行う。 (イ) 実験結果について考察することで、情報整理の技能、思考力、表現力を育成する。 (ウ) 高校においては、これまでに以上に授業、朝テスト、課題を関連させる。	(ア) 中学校でも高校でも目標に達成し、実験を生徒たちの興味や関心を引き出す一助とすることができた。中でも中学は教科書実験をほぼすべて実施し、生徒たちの理科に対する興味を高めることができた。 (イ) 中学校でも高校でも考察をより充実させることができた。中学校では多くの実験が行われたが、それぞれについて考察や意見交換を行う時間を設けることができた。 (ウ) 高校では授業と課題の関連性を強め、学習内容の定着を生徒自身に実感させることができた。また、授業へ主体的に取り組み姿勢をつくるきっかけとすることができた。	A
教科	理科	55	学力向上に向けた指導内容や指導方法などの検討を進める。	(ア) 各科目の模試における平均偏差値を2ポイント程度向上させることを目指す。 (イ) 模試や共通テストを見据えた問題演習や定期試験の作問に取り組む。 (ウ) 生徒の実態に合わせた指導法の検討と、科目の枠にとられない情報共有を行う。	(ア) 教員の指導の幅が広がった一方で、模試や共通テストの結果は多くの科目で例年並みに留まった。模試や共通テストの受験者数の変化から、推薦による大学入試の拡大の影響が顕著に読み取れる。これまでもと違った分析を進め、指導改善につなげなければならない。 (イ) 各学年の担当者が検討と実践を重ねた。特に高校3年生には受験に向けた演習が多く行われた。 (ウ) 各部署と連携を図り、生徒たちの個性や実情を把握することができた。また、こうした生徒の実態に合わせた指導を検討し、実践することができた。	A
教科	理科	56	薬品および備品の精査と点検	(ア) 年3回の薬品の定期点検を今年度も実施する。 (イ) 各教員が把握している備品の状態のとりまとめを行い、使用頻度や所有年数による不具合が顕著なものに関しては修繕や買い替えの計画を練る。	(ア) 定期的に薬品の状態を確認し、不足のない状態を維持することができた。 (イ) 各教員から備品の状態を聞き取り、経年劣化などについて把握を進めた。すべての備品について状態を把握できなかったため、来年度も継続して調査を進め、修繕や買い替えの計画立案を進める。	B
教科	英語	57	組織的な指導体制を強化し、生徒一人一人の進路実現のための学力をつける。	(ア) 補習系のSGTや講座を開講し、幅広い学力層に合わせたサポートをする。 (イ) 学力下位層に対し、試験前だけでなく日頃からの支援体制を整える。 (ウ) 共通テスト平均点において、探究クラス70%、それ以外のクラスで60%の得点率を目指す。	(ア) 高3の共通テスト・私大対策として、補習系SGTを充実させることができた。他学年については、授業時数内でしっかりサポートできている部分と、次項で述べるように担当者が独自に補習をしたり、意欲のある者には追加の課題を与えるなどして細やかな対応ができていたと考える。 (イ) 観点別評価になり、赤点はつきにくくなったとはいえ、やはり自力ではやれない生徒もいるのが現状。各学年の担当で、提出物の管理や、朝テストや小テスト後の補習・再試などかなり細かく面倒を見てくれていると考える。また、クラス担任との連携も密に行っている。 (ウ) 全国平均117.5点に対し、探究系は136.9点(+16.5%)、一般クラス104.2点(-11.3%)という結果になった。特に、一貫探究系の活躍がすばらしかった(156.5点)。一般クラスでは私大を目標にする生徒も多いことを考慮すればよく健闘したと言える。	A
教科	英語	58	観点別評価の項目を整理し、デジタル教材を有効活用しながら公平な評価を行う。	(ア) 学び点について学年統一の評価材料を4項目以上設定し、担当者裁量を極力減らす。 (イ) 担当者間での情報共有を密に行い、評価に使用するプリントや小テストなどの教材を共有フォルダに保存するなど作業効率を上げる。 (ウ) 担当者とも打ち合わせを定期的に行い、デジタル教材やweblio studyを活用する。週に1回は授業で扱うことを目指す。	(ア) 学年共通の評価材料を4項目以上設定することはできなかった。しかしながら、ほとんどの系統において客観的な評価項目を十分に用いることができた。今後は、教員間での情報共有を促し、引き続き公平な評価に努める。 (イ) 担当者それぞれのやり方もあるので、オリジナルの教材を共有する場面はあまりなかったと感じるが、指導者用の教材については校内フォルダに保存し、いつでも誰でも使用できる状態になっている。また、会話の中でこの教材が使いやすい、などの情報共有ができていた。 (ウ) weblio studyの活用については、各学年の担当者と業者間で複数回打ち合わせを行い、生徒に必要な教材を適切なタイミングで提供できたと感じる。また、業者からのフィードバックも定期的に受け取り、有効に活用できた。	B
教科	英語	59	実用英語技能検定などの、4技能資格試験における取得率、およびスコアの伸長を図る。	(ア) 中学3年生に対し5回、高校1年生に対し1回オンライン英会話を授業中に実施し、さらに高校1年生から3年生はオンライン英会話を自宅受講の形で実施する。 (イ) weblio study でリスニング指導やスピーキング指導を効果的に取り入れる。 (ウ) 英語技能検定で、高校卒業時に2級で50%、準2級で65%の取得率を目指す。 中学生は、卒業時に2級で15%、準2級20%を目指す。	(ア) 予定回数を実施することができた。実施日について、見落としが無いよう今後も授業担当・教務課との情報共有を密にする。 (イ) 学年の担当者と業者間で連絡を取り合い、英検や音読の課題を定期的に配信し、取り組ませることができた。また、取り組み状況をデータで配信してもらうことで、教員の作業効率も向上した。 (ウ) 英検校内実施受験者数、のべ499名。昨年度に比べ大幅に受験者数を伸ばすことができた。これは大学入試において英検の重要度が増していることを生徒も十分に認識できている結果である。(現高3生の3年間のべ取得率:2級29%、準2級29%。ただし、校内実施のみの数値。中3取得率:2級4%、準2級24%。ただし1月時点。)	A
教科	保健体育	60	十分な基礎体力と実践的な知識・技能の習得を促し、生涯にわたって運動やスポーツへの興味・関心を持ち、主体的に実践できる資質を育成する。	(ア) 春先に新体力テストの種目練習および計測を行い、現時点での体力水準を把握する。その上で目標を設定し、実践内容を明確にし、秋の新体力テストに向けて向上を図る。年間を通じて課題を意識させ、継続的な取り組みを促す。 (イ) 運動量の確保を図るため、教員間および体育委員との連携を図り、運動場所の調整や協力的な取り組みを計画的に実践していく。 (ウ) 保健の授業では、ICTを活用して振り返りレポートの作成を充実させるとともに、AEDの実技演習などを通して、知識だけでなく実践力を養い、実生活に生かせる技能の習得を目指す。	(ア) 新年度に新体力テストを実施し、結果をレポートにまとめて課題を明確化した。秋にも再度実施し数値が向上、優秀校として表彰を受けた。成果と課題を整理し、次年度へつなげている。 (イ) TTや複数教員の配置により、習熟度別に集団を分けたり、複数の場所で同時に授業を展開したりすることが可能となり、従来よりも円滑な授業運営が実現した。生徒一人ひとりの活動時間が確保され、運動量の向上にもつながったと考えられる。 (ウ) 複数単元が終了した後は、ICTや図書館を活用し、興味・関心に応じたテーマを設定させて課題学習に取り組ませた。また、AED実習ではグループで協力しながら教え合い・評価し合う活動を行い、実技試験を実施して実践力の向上を図った。	A

担当部署		No.	2025年度重点目標	具体的施策及び計画	達成状況 (重点目標を達成するために行った具体的事項)	達成度 A・B・C・D
教科	保健体育	61	十分な運動量を確保することで生徒の体力向上を図るとともに、問題発見・解決能力を高め、適切な方法を選び出す力を育成する。	(ア) 必要なタイミングで振り返りシートの記入を促し、十分な記述量を確保させることで、気づきや発見といった思考が運動能力の向上に不可欠であることを自覚させる。 (イ) 新体力テストを振り返りながら日々の運動に生かすとともに、球技ではグループでの練習を通して他者にアドバイスする場面を設け、アウトプットを通じた学びへとつなげる。 (ウ) ICTを活用して調べ学習を行ったり、可能であれば動画を撮影してフィードバックを得たりするなど、運動能力に偏重しない新たな体育の授業展開を工夫する。	(ア) 毎時間の体育で振り返りシートを記入させることで、自身の課題を明確にし、自己評価を行いながら主体的に活動できるようにしている。テーマを持って授業に取り組むことで、考えて実践するサイクルの定着につながっている。 (イ) 球技大会に向けてグループ分けを行い、各集団の実態に応じた課題を設定して内容を工夫することで、自己のプレー改善につなげている。また、教員含め、支え合いの活動を通して、技術面だけでなくコミュニケーション能力の向上も図られている。 (ウ) ICTを活用した調べ学習は実施できているが、体育授業での動画撮影については課題が残っている。機材の運搬やデータ管理、効果的な活用方法などを整理し、今後どのように授業へ展開していくかを検討していきたい。	B
教科	保健体育	62	合併授業や分割授業の特性を生かし、生徒の満足度をさらに高めるとともに、安全面への配慮や、きめ細やかな指導の実践に努める。	(ア) 昨年度の反省を踏まえ、今年度は改善を図りながら実践を積み重ねていく。教員間で密にコミュニケーションを取り、授業内容の改善に努めることで、生徒の満足度向上につなげる。また、必要に応じて臨時の教科部会も開催する。 (イ) 授業評価を昨年度と比較した結果、改善が見られたことを踏まえ、今年度さらに向上できるかどうかを一つの指標とし、すべての教員がレベルアップを図れるよう努める。 (ウ) 複数教員による指導の利点を生かし、習熟度別の指導や、練習・ゲーム・テストなどの活動を分割して展開することで、柔軟な対応を可能にする。	(ア) 日頃から教員間の情報共有を密に行うことを習慣としており、定例の教科部会に加えて臨時の会議も開催している。行事に関する情報共有や改善点の洗い出しを行うことで、結果として生徒の満足度向上にもつながっている。 (イ) 昨年度の授業評価において改善が見られたが、今年度も引き続き向上傾向が示されている。TTや複数教員による授業体制により、生徒一人ひとりに対して丁寧な指導が行えていることが結果にも表れている。 (ウ) 一方で指導を行い、もう一方で試験を実施するなど、複数教員による運営体制により授業進度を滞らせることなく進行できている。また、教員が出張等で不在の場合でも授業を継続でき、柔軟な対応が可能となった。	A
教科	芸術	63	教科の本質を踏まえた授業により、生徒が生活や社会の中で芸術や芸術文化と豊かにかわる資質・能力を育成する。	(ア) 周囲の世界や自然環境を深く観察し、そこから「美」「調和」「多様性」「面白さ」等を感じ取ることができしなやかな力を育む。 (イ) 鑑賞授業の工夫・充実に努め、芸術文化に対し、そのよさや豊かさをどのように味わっているかを自分の言葉で表現し自分の思いや意図を周囲に伝える力を育む。 (ウ) 表現技能の習得のみを学習の目的とせず、インフォーマルな学習を通して生徒の内発的な表現意図を高める学習単元を創作する。	(ア) 「風の音がピアノの分散和音のように聞こえる」等、聴いた音やそこから感じたものを、言葉や自分なりのサウンドマップで表現するなど、目に見えないものを自身の感性と結び付けて表現する事例が見られるようになった。美術科でも「同じ青色でも、光の当たり方によりこれほど変化する」といった色彩の豊かさや感銘するなど、観察による発見の深堀りが見られた。 (イ) グループ活動の中で友人との対話を通して、観察、推論、解釈を深めようとする生徒は増えている。「何を感じたか」のみでなく、「作品のどこからどのように感じたか」を述べた生徒が見られた。「音の動き」「材の質感」など、生徒が教科特有の言葉を用いて言語化を行おうとしていた。 (ウ) 特に授業の中で、完成した作品の技術より、表現に至るまでのプロセスや自己調整の姿により視点を置くよう心掛けた。形成的な評価からは、友人の考えの面白さや作品の良さに触れ自分の表現をさらに深めようとする内容が見て取れた。さらに、授業の振り返りを工夫し、自分の考えや作品がどう深化し、そのために何をしたかというプロセスを見取っていききたい。	A
教科	芸術	64	教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、社会や文化と深くかわる学習過程を創造する	(ア) 2年間の課題全般を通し、日本と西洋の価値観や世界観の相違を学び、日本文化を客観視できるようにする。 (イ) 社会という「場」にかかわる題材を年間指導計画に設定し、制作過程や成果物の展示・掲示を年間3回は行い、校外へのアピールを積極的に行う。 (ウ) 常に教科の「見方・考え方」を念頭に授業を進めることにより、教科の本質を踏まえた学習内容や学習プロセスを設定し、「深い学び」の実現を目指す。	(ア) 何よりポートフォリオが不可欠であり、それぞれの題材で日本と西洋の対比を行い、その記録の蓄積に力を入れた。浮世絵と印象派の海外を通じた比較により独自の空間把握として言及する生徒も見られた。西洋音楽の「構成、ハーモニー」と日本音楽の「音色、間」の違いを身体感覚や分析を通して理解しようとする生徒も見られた。 (イ) 生徒の作品を個人の自己表現に留めず、社会的なコミュニケーションのツールとして捉え直すように心がけてきた。今後さらに生徒同士だけではなく、鑑賞者全般からのフィードバックを評価に組み込んでいきたい。事後の評価からは、作品そのものではなく、社会に関わろうとしたプロセスを記述する生徒も見られた。 (ウ) 単なる知識ではなく、対象(音や形、色)をどう捉えなおし、自分の表現や鑑賞にどう結びつけたかという思考のプロセスを見取することを心掛けた。「面白いと感じる曲」を深堀りし、「裏拍のリズムと高音域の音色が重なるために躍動感が生まれる」という音楽の仕組みを根拠に語る生徒が見られた。偶然生まれた色や形を見て新たな意味や構想を生み出す生徒も見られた。	B
教科	芸術	65	表現能力の基礎となる「プレゼンテーション・リテラシー」を生徒一人ひとりが身に付け、文化の異なるグローバルな他者と思いやアイデアを共有する	(ア) 日々の授業において、生徒のコミュニケーションの場を充実させ、表現に至らないイメージ、言葉に置き換えられない世界等を可視化させていくことにより、生徒一人ひとりの自己有用感を高めていく。 (イ) 複数の知識や技能を組み合わせることで表現・活用する場面を創り出し、「思考力・判断力・表現力」を育てていく。 (ウ) 多様な学習形態や学習集団の中で、他者とアイデアや思いを共有することにより、生徒が自ら考え、自ら表現し、表現力を高めていく。	(ア) 最終的な作品やレポートではなく、その手前にある迷いや思考の密度をできる限り評価するよう心掛けた。教師と生徒との対話を経て生徒のイメージがどう具体化されたかを見取っていったが、さらに評価シートに、言葉にできない今の気持ちを色や図で示すなど、非言語的な表示枠を設け手評価する方法も今後思考したい。 (イ) 生徒が主体的に取り組む評価活動は、生徒が自分の学びをコントロールし、表現を追求するため手段として捉えた、教師が設定した基準だけでなく、自分は今回の製作にどんなこだわりを持ちたいか(音色の追求、色の重なりなど)を評価に追加した。生徒は自ら作った基準だからこそ納得感をもって「思考力、判断力」を育むような活動や製作に打ち込むことができた。 (ウ) 「見方・考え方」を意識し生徒がどのように知識や技能を総動員したかを見取することを心掛けた。単元の途中で中間発表や製作の公開を行う時間を工夫して設けた。生徒のフィードバックのやり取り自体を主体的に取り組む態度として評価した。他者の評価を受けて自分の意図がどう伝わったかをどれほど分析できるかが今後の課題であると感じている。	B
教科	技術・家庭	66	生徒が授業内容と自分の生活とのつながりを考え、何のために学ぶのかを理解し、協動的な学びを通じた広い視野に立つてものごとを見る姿勢を身に付けさせる。	(ア) 生徒が自ら考える場を設け、各自の考えを深めさせる。また授業の振り返りを行い、生徒の理解について確認する。 (イ) 生徒が自分ごととして興味関心を持てるよう、実習授業や外部講師による授業を積極的に取り入れる。 (ウ) ICTを活用し、協動的な学びにつなげる。また、最新の情報から物事を捉えられるようにする。	(ア) グループでの話し合いを取り入れ、協動的な学びにつなげることができた。単元ごとの授業の振り返りで、生徒の理解度だけでなく、興味を持った事やさらに知りたい事の確認をすることができた。 (イ) 全学年において、実習授業の機会を持つことができた。調理実習後の振り返りでは、高校卒業後の生活に言及する生徒が多数おり、その場の楽しさだけでなく、将来の自分の生活を考える機会となった。 (ウ) ICTを活用することにより、最新の情報を元世の中を考える授業ができたが、活用が個人にとどまり、協働までつなげることができなかった。	A

担当部署		No.	2025年度重点目標	具体的施策及び計画	達成状況 (重点目標を達成するために行った具体的事項)	達成度 A・B・C・D
教科	技術・家庭	67	実技・実習などの実践的・体験的活動を通して科学的な理解を深める。また、製作を通してものづくりの喜びを知らせる。	(ア) 製作授業:【技術】木工作品(中1)、LED電気スタンド(中2)、プログラミングを利用したロボット製作(中3)【家庭科】ポーチ製作(中1)、アニマルクッションの製作(中2)、保育に関する製作(中3)、エプロン製作(高2) (イ) 外部との交流:保育実習(中3)、保育実習・外部講師による消費者教育、(高2) (ウ) 体験的活動:調理実習1回・洗濯実習(中1)、調理実習2回(中2)、調理実習2回・絵本の読み聞かせ(中3)、調理実習3回・高齢者体験(高2)	(ア) 計画していた製作授業を全て実行することができた。進みの遅い生徒には補講を行うなどして、全員が作品を完成させることができるよう声掛けをおこなった。 (イ) 計画通り実施できた。保育実習では、実習前後で幼児のイメージがプラスに変わる生徒が多く、実習をきっかけに保育の仕事に興味を持った生徒もいた。 (ウ) 計画していた活動に加え、中2・中3の家庭科では包丁の切り方テストを行い、実践的活動を通して技術の定着を図ることができた。	A
教科	技術・家庭	68	生徒が安全に実習・製作に取り組めるよう実習室の環境を整備する。	(ア) 備品の整備・点検・補充、消耗品の補充を定期的に行う。備品の購入は早めに計画的に行う。 (イ) 技術家庭科実習室:用具・教材の整理。ミシンの整備点検を最低年1回。生徒作品の管理の徹底。 (ウ) 調理室:衛生管理を実習ごとに実施。(まな板の確認、引き出し・オープンレンジ内のチェック、冷蔵庫内の整理)、定期的に包丁の手入れ。	(ア) 実習ごとに消耗品の補充をし、痛みの目立つ備品については買い替えを行い、生徒が安全に使用しやすい環境を整えることができた。 (イ) ミシンの整備点検を実習前に行い、生徒の作業がスムーズに進むよう整備ができた。生徒の作品管理についても徹底できた。 (ウ) 実習前後で使用器具の衛生状態をチェックし、静学祭の模擬店使用時も安全な調理環境を提供することができた。	A
教科	情報	69	生徒一人一人の好奇心を高めながら、情報機器を表計算による統計処理や情報整理、プレゼンテーションによる表現の道具として適切に活用できるように育成する。	(ア) 中学までの習得状況に差があるので、全体のスキルの底上げができるよう丁寧に説明する。 (イ) 小中の学習を基礎に、身近な事例をもとに情報に関する応用力を育てる。 (ウ) 全体的イメージを図版やイラスト・アニメーションを用い興味を持てる学習に心がける。	(ア) 中学校までの習得状況の差を踏まえ、基礎的内容から丁寧に指導することで、全体のスキルの底上げを図った。 (イ) 小中の既習内容を基礎に、身近なテーマを用いて表計算による分析活動を実施した。多くの生徒が基礎技能を活用し、データを主体的に読み取る力を身に付けることができた。 (ウ) 図解やアニメーションを効果的に取り入れたことで、抽象的内容への理解が深まり、授業への関心や発言も向上した。視覚的支援は理解促進に有効であり、学習意欲の向上につながった。	A
教科	情報	70	情報の収集・処理・表現を通して広くコミュニケーション能力を養い情報社会に積極的に参画する態度を育てる。	(ア) インターネットから情報の収集を行い、整理しまとめスライドに表現することで情報の検索・収集能力を養う。 (イ) 生徒一人一人が作成したスライドを発表し、相互に評価し合うことでコミュニケーション力を養う。 (ウ) 情報の収集、処理、発信の基礎的な知識の習得およびマナーとルール必要性や情報に対する責任について考えさせる。	(ア) インターネットを活用した情報の収集・整理・分析・発信活動を授業に取り入れ、情報活用能力の向上を図った。 (イ) 生徒一人一人が作成し、情報デザインを取り入れたスライドを発表し、相互評価を行うことで、表現力およびコミュニケーション能力の育成を図った。 (ウ) 情報モラル、マナー、ルールおよび情報発信に伴う責任について指導し、情報社会に主体的に参画する態度を育成した。	A
教科	情報	71	共通試験に向けて新たに加わった情報への対応を行う。	(ア) 放課後のSGTを利用しながら3年生への共通テスト対策講座を用意する。 (イ) 放課後のSGTを利用しながら2年生への基本事項の広い知識、プログラミングを利用した思考力を育てる。 (ウ) 新年度から開講される教科横断型科目「情報教養数学」の内容を完成させていく。	(ア) 放課後のSGTを活用し、2・3年生を対象とした共通テスト対策講座を年間を通して計画的に実施した。 (イ) 2年生には基本事項の総復習を中心に、知識の定着と理解の深化を図った。3年生には演習形式の講座を実施し、問題解決力および実践的応用力の向上を図った。 (ウ) 来年度からの新科目情報教養数学の情報部門についてデータサイエンスを中心とした理論及び、実習内容を精査している。	B
事務局	総務課	72	財務状況の改善	(ア) 今年度予算に計上されている事業について重要度、優先度を再確認し、実施の是非を検討する。可能なものについては、事業規模の見直しや次年度以降への繰越を行い、収支改善を図る。 (イ) 補助金や助成金の活用及び寄付募集を積極的に行い、増収を図る。見積合せの実施を徹底し、支出削減を図る。 (ウ) 15,000千円の収支改善を目指す。 ※改善額の15,000千円は事業活動収支改善額と施設・整備関係支出削減額の合算とする。	(ア) 予算に計上されている事業について重要度、優先度の再確認を行い経費削減を図ったが、現時点において事業規模の見直しや取り止め、次年度以降への繰越等の対象となる事業はなかった。予算外の大きな補正もなく、計画通りの決算見通しとすることができた。 (イ) 体育館アリーナの空調設置工事の実施に伴い、「私立学校施設整備補助金」を申請し採択された。これにより費用の1/3の額の補助金を獲得することができた。また、見積合せの実施を徹底し、支出の削減を図った。 (ウ) 収支改善の取り組みの結果、本年度決算見通し(1月末現在)で事業活動収支が当初予算よりも改善されるメドがたった。	A
事務局	総務課	73	施設・整備の新設・更新及び修繕の計画的な実施	(ア) 今年度計画されている施設・整備工事を再確認し、確実に実施する。 (イ) 体育館・グラウンド・教育棟一部のLED化工事及び体育館アリーナの空調設置工事の円滑な実施を図る。 (ウ) 大規模な工事となるLED化と空調設置工事について、国庫補助金を確実に獲得するとともに、寄付募集も行き、増収を図る。	(ア) 今年度計画されていた施設・設備工事の確認を行い速やかに着手した結果、すべて実施及び発注済みとなっている。(2月末現在) (イ) 体育館、グラウンド、教育棟(一部)のLED化工事及び体育館アリーナの空調設置工事について、7月上旬より工事が開始され、大きな問題等もなく順調に進捗し、12月初旬に検収引き渡しとなった。 (ウ) 体育館アリーナの空調設置工事の補助金手続きについて、工事契約業者と連携して実績報告書の作成に取りかかっており、予定通り2月末に実績報告書を提出できる見通しとなっている。	A
事務局	総務課	74	特別会計の財務状況の把握と有効活用の検討	(ア) 特別会計の財政状況を把握し、支出基準の見直しを行い収支改善を図る。 (イ) 教育内容の向上に役立てるために、より有効な活用方法を検討、決定する。 (ウ) 特別会計の会則・内規・申し合わせ事項を現状と照らし合わせて見直し、必要に応じて改正や制定の手続きを行う。	(ア) 特別会計の財政状況を9月末、12月末で確認し、後期及び次年度の見通しを立てた。今年度については事業規模の見直しや取りやめの対象となる事業はなく、計画通りの決算見通しとすることができた。 (イ) 次年度からの学費値上げにより、特別会計の収入も増えるため、生徒へ還元できる活用方法について検討している。 (ウ) 特別会計の申し合わせ事項について、財務状況により支出金額や支出項目を現状と照らし合わせて見直しを図った。	B
事務局	学務課	75	学納金の確実な収納	(ア) 生徒・保護者には年度初めに「授業料等納入計画表」を配布し、月初めには振替日及び納入額等を一斉メールで配信。「授業料納付金収納状況」及び「未納者一覧表」を毎月管理者に回覧し、収納状況を共有する。 (イ) 学納金担当2名体制をしき、毎月の学費引落管理、学年部ごとに異なる学年費等の都度管理、総務側の会計伝票と齟齬のないダブルチェック、未納者への催促、をおいカバシあうように進める。 (ウ) 高校の学納金では、①就学支援金 ②静岡県の授業料減免 ③高校生等奨学金給付金 ④育英会などの個別奨学金 と種類が豊富なため、学納金担当2名+もう1名の3名体制で未納者のサポートを適切に行い、確実な収納を行う。	(ア) 学費に関する諸連絡をBLENDに一本化し、年度初めに授業料等納入計画を配信、月初めに振替日・納入金額を配信、完納者は引落明細をBLEND上でチェックでき、未納者には即座に振込依頼書を配信&個別連絡(電話、手紙、担任経由で呼び出しなど)。R6からこの方法を取り入れ、R7から2名体制で流れを定着させた。結果、未納者を若干名に留めている。 (イ) 新入職員の配属により学納金担当2名体制をしき、全校生徒の毎月の学費管理、就学支援金の申請～認定作業をダブルチェックにより着実に進めた。慎重を要する業務(未納者への催促、転退学者への預り金返金など)については、学費担当2名+学籍担当+経理担当による4者間でチェックを徹底している。安定した事務処理とノータラブルで進めている。 (ウ) 高校生への奨学金については、①就学支援金、②県授業料減免、③奨学金給付金、④育英会など個別の奨学金、⑤本校からの奨学金と種類が豊富なため、学費担当2名+返金担当1名のトリプルチェックにより、確実な返金作業ができています。	A

担当部署		No.	2025年度重点目標	具体的施策及び計画	達成状況 (重点目標を達成するために行った具体的事項)	達成度 A・B・C・D
事務局	学務課	76	入学定員の確保(中学90名、高校360名)	<p>(ア) 中学入試の志願者1.2倍以上＝115名(校長計画)。小学校訪問(チラシ配布等)でのアプローチを重視しながら、①静岡市内(特に清水区)児童、女子児童、塾に通う児童を増やす。入学試験について、「小学校の勉強を頑張れば合格しやすく、特待生も付与される入試」という方針・見せ方で進めたい。</p> <p>(イ) 高校入試の志願者単願210名以上、併願1,200名以上(校長計画)。単願者の獲得には特待生のアピールが必須であり、就学支援金年額45万7千円の一律支給とセットでアピールする。併願者の獲得には進学実績が成績上位者の目に確実に触れるようにHPを活用したり、一部横断幕の作成も進めたい。</p> <p>(ウ) 中学・高校ともに個別相談会を適切な時期に行い、相手の不安を回収し、アピールも欠かさない。中学相談は夏休み前後、高校相談は10月以降を特に重視する。大型イベントと併用での開催や平日・土曜の随時開催を通して受験者との接触を増やす。その情報を次の学校訪問につなげることを大切にする。</p>	<p>(ア) R8中学入試では志願者目標115名以上に対して138名となり、無事97名入学で定員達成。参与が放課後に小学校担任と会えるように勤務時間を調整したり、募集要項を6月頭の私立中学校フェアに間に合わせるなど、訪問の質と資料提供の質を改善した。塾に通う児童にも情報が届くよう、塾向け説明会を昨年に続けて実施した。生徒募集委員会では、中学入試から英語を廃止し、「算数・国語問題を過去問題に基づき対策すれば合格できる」と感じる内容に改善した。</p> <p>(イ) R8高校入試では単願者目標210名以上、計1410名以上に対して単願者277名、計1417名の志願者となり、単願と一貫生89名で定員360名を達成できる見込みである。単願者獲得増に向け、生徒募集委員会では内申点による特待基準の拡充を行い、その基準公開を積極的に行ったことが功を奏した。就学支援金拡充についても、行事、HP、印刷物で都度発信し、特待生でなくとも学費負担が少ないことを訴求することで、私学受験のしやすさをイメージ付けることができた。</p> <p>(ウ) 小中学生の動向に合わせて入試広報を心がけた。参与の学校訪問、学校案内の郵送、イベントの開催において、それぞれ時期や方法をマイナーチェンジしながら、広く素早く受験情報が行き届くように心がけた。参与の学校訪問記録を参考に、小中学校の考えや悩みを読み取りながら、学務関係者一同、入試広報の1つ1つを丁寧に進めることができた。</p>	A
事務局	学務課	77	特待生制度の検討	<p>(ア) 中学入試ではR7入試で特待Aを3名、特待Bを5名に付与した。特待Aの人数を5名以上に拡充したい。中学3年間は国や県からの授業料補助は一切ないため、中学受験の金銭的なハードルは依然として高い。特待Aの人数が増えることで優秀児童の獲得となり、将来的に難関大学への進学実績向上がアピール材料となって返ってくると考える。</p> <p>(イ) 高校入試では就学支援金の拡充を受け、生徒数分×年額45万7千円が国から本校に支給される。この利点を活かし、現行の特待生制度の付与額、付与条件についても思い切った拡充を行いたい。静岡県では依然として公立高校人気が高いため、根底をくつがえすようなアピール(学費が大幅に免除されつつも、充実した授業や学校生活が送れること)を行いたい。</p>	<p>(ア) R8中学入試では特待生枠の拡充(入学定員の5%→10%)を売りにして募集活動を進めた。97名入学者のうち、特待A:4名、特待B:6名を付与し、規程と募集要項の条件を両方満たす結果、かつ募集効果の期待を次年度に残すことができた。</p> <p>(イ) R8高校入試では就学支援金(年額457,200円)×生徒数分が国から本校に支給される。この利点を活かして内申点による特待基準を拡充した。結果として単願者277名のうち94名(R7は72名、R6は66名)が特待A・特待Bに相当し、単願者獲得増の大きな一因となった。※12月の相談票回収時点での数字</p>	A